
高校生活と探し物

撫子 雪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生活と探し物

【ISBN】

NZ8746NZ

【作者名】

撫子 雪姫

【あらすじ】

非日常な日々と探し物。いろいろなことに巻き込まれていく彼の運命は・・・・?

入学試験と拷問（前書き）

初めてですので、お手柔らかにお願いします。

入学試験と拷問

「、」が俺の受験の高校、あああ高校（仮）かあ・・・
ん？（仮）つて…まだ名前が決まってないのかな？
そつなら適当すがりだろ・・・

先生に勧められて入ったんだけど、どういづ高校なのか、謎だ。
ネットで調べても、都市伝説ばかりだし・・・
都市伝説によると、頭や運動神経がかなりいい人たちが集められる
とか・・・
この先不安だ。

俺はその不安を振り払つて、試験会場へ向かつた。

試験会場に入ると、重苦しい雰囲気が俺を襲つた。
プレッシャーといつか、なんといつか、とにかく空気が張り詰めて
いる。
ここから早く逃げ出したいくらこの空気が俺の具合を悪くする。
・・・腹が痛い。
うわ、最悪。こんなときによ・・・
と・・・・・トライに行こう！今ならまだ間に合つ・・・・・・
る…！

ジャー――

「ふう・・・今何つつーー・やまつーー・10秒前だしーー・」

この時計は正確なのかどうか知らねえけど、完全に遅れる…！

俺は全力で走った。走りまくった。

ガラツツ

「セ・・・・セーフ？・・・なの・・・・・か？」
しーーーん

うう・・・アウトか？

「早く席に着け、天神どくろくアマガミ ドクロヘ」

セーフ？ セーフなのか？

まあいいか。 とにかく座るつ。

「私は担当の希咲遙くキサキ ハルカ♪だ。」

おお、よく見たら超美人。

「では、今から筆記試験を開始する。へタな真似をしたら即失格だ。
いいな？」

プリントが配られる。

「開始つ！！」

バツ

おおー！なんだこれ！？超難しいじゃねえかー！普通なら絶対に解けねえぞ！

…だが俺は普通ではない！天才秀才天神どくろ様だ！

・

・

筆記試験が終わることには、俺はゲッソリになつていた。

「な・・・なんなんだあの問題は・・・拷問並みに難しいぞ・・・」

「おい！まだバテるなハゲ！！次はもつときついのがあるんだぞ」

・・・え？

「ふん、聞いて驚け。いや、これを聞いて驚かない者はいない。いや、すこしひはいるかもしかれんが・・・」

な、なんだ？

「体力試験だ！！」

「へえ――・・・・・ふえ？た、体力試験だと？そんなの聞いてねえよつ――！」

「ふふふ、私には見えるぞ。貴様らのバテる姿が。」

いやいやいやいやまじで無いわーまじありえねえしーマジ聞いてねえしー

「ああ、移動するぞ。体育館に」

続く

入学試験と拷問（後書き）

かなり読みずらい」と思いましたし、ヘタクソだと思います。
最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。

入学試験といきなり2（前書き）

書かねば書かないと思って2話題です。

入学試験とト拷問_2

た・・・体力試験だと!?

も、もちろんやつてやるさー!母ちゃんに約束したからな!
長い廊下を歩いて2分。ようやく体育館についた。

「よく聞け。今から3人一組のパーティーを作つてもいい。好きな相手でも何でもいい。」

え。よく見たら知ってる人いませんけど。これ俺残るパターンじゃね?

「ん、じゃあもう組んでいいぞ。必ず3人一組な。確実に余らないからな。制限時間10分。」

や、やつてやるぜー!余らないんだからな!

たぶんこれは積極性とかいろいろ見られると思つぞー.俺的に。

まあまずは、なんかみんなに話しかけられなくてモジモジしている女の子に限る!!なんかかわいいし

と思つたらさつそく発見!!ポニー テールの茶髪の女の子ーかわいいー! ものすゞー!

あの子すげー モジモジしててるが。

とりあえず話しかけてみるか。

「あ、あのー俺と一緒に組みませんか? あ、無理ならいいんだけど・

・」

「えー? 嘘! 本当ですか! ? ありがとうございます! ! 誰にも話しかけられなくて、もう無理かと思いました(ニヤッ)」

か、かわええ／＼／＼／＼

「名前、なんていうんですか？あつ私、春色咲楽^{クハルイロ} サク
ラ ハツ ていいます」

「俺は、天神^{ヂクニ}」

すゞしく魅力的な名前だ。咲楽ちゃんの雰囲気にそっくりだ。

「私、同じ学校の人連れてきますので、少し待っててください」
咲楽ちゃんは大きく息を吸うと、精いっぱいの声で、

「巻くう――――――ん――――」

4秒後

「なんだ？」

「さつすが巻君！早いね！俊足だね！」

お、黒髪セミロングのナイスガイだ。

「じくろくくー！紹介するね。巻蓮^{クマキ} レン^ハ君ーおひななじみ
だよつ」

いつのまにか咲楽ちゃんがタメ語になつてゐるーすげー嬉しいんですね
けどーー

「あのね、巻君、一緒に組んでくれるよね？」
「あ、あたりまえだ。」

「こいつ、咲楽ちゃんの可愛わー一撃でやられたな

「よろしくなつ！蓮つ 僕の名前は、「天神どくろだる。」

う、あの腹痛事件（？）で一気に目立つてしまつたか。

「あ、言い忘れてしまつていたが、パーティーが組めた次第、あそこの受付で登録してもらひえ。」

おいおいおいおい、言い忘れるなよな。試験管だら。一応。

「せ、パーティーも組めたところだし、さっそく登録しに行くか。
「いえつさあー！」

おい待て、なぜ貴様が仕切つている。ま、いいけどな。

「やうだなつ。せ、行こうぜー。」

「よし、これで全員組めたな。ドアを開けたらアスレチック的なものが待つてゐる。ゴールまでパーティー全員でたどり着くんだ。いいな？」

よーし、気合入れいいぐぜえーーーー！

続く

入学試験といと拷問 2（後書き）

最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。
一瞬でも読んで下さった方もありがとうございます。

入学試験と拷問3（前書き）

3話目です。
よろしくおねがいします。

入学試験と拷問③

ガチャ

体育館の扉が開かれた。

・・・・・広っつつ！

どれくらい広いかといふと「おおおおおおおおく広い！」

その体育館の中にはかなり大きいアスレチック的なものがあった。
それもまた、ゴールが見えないほどの大さだ。
たぶんトラップなどといふ仕掛けもあるのだろう。

「ゴール、できるかなあ？」

「大丈夫じゃね？何とか」

頑張れば何とかなる！！たぶん・・・

「お前、頑張れば何とかなる！・・・とか考えてないよな？」
「う・・・計画的に頑張ればいいと思います。」

何だこいつ！読心術でも使えるのか！？

「では、行くぞ！フライングはなしだからな。」

OK！－遥先生。

「よおーい・・・・ドン！」

遥先生の掛け声により、いつせいに全員が走り出した。

「チームワークを乱すなよ。ホールの為にな（ニヤニ）」

「くわー超あつつい！…」

ずっと上のばっかしで、超疲れるんですけど…

「疲れるね（ニヤニ）」

咲楽ちゃん、全然疲れていないように見えませんけど?
おまけに蓮なんかは顔色一つ変えやしない。

くわつ腹立つ！

「うおおおおおおおおおおおおおおお…！」

「おこ…こきなりペースを上げるなバカ…はぐれたらひづくなるつ
もりだ！」

「なつなんだよ…いいじゃねーかよ」

「ど…がいいのかさっぱりわからないなバカ…」

「なつバカバカ言つなよ…！頑張ってるじゃねーか俺が！全身全靈

「...」

「お前の頑張りは空回りしてんだよ。」

今にも顔がくつむかへうなぐらこ顔を近くにして言ふ争つてゐる。

「巻册もどく君も仲良しだね！」

グリンシと联楽に顔を向けて、

「「ジ」をびう見たら仲良しに見えるんだよ。」「

やべえハモつた。

息ぴつたりじやん。

「チツ オラ、さつあと行くべ。」

「わかつてゐつつーの。」

俺は反抗期の息子かよ！！

もつ向としても合格して蓮を見返してゐる。

俺が決意を決めた時だつた。

とんつとんつとんつ

木の柱を軽い足取りで跳ぶよつと進むパーティーがいた。

「なんだありや、すゞあざるだ。」

「すゞいね。ねつ巻册。」

「やつだな。」

短髪の赤いマフラーをした男は、首元に狐の入れ墨あって、三つ編みの女は腕に蛇の入れ墨、黒髪のポニーテールの男か女かわからない奴は、背中に般若の入れ墨があつた。

不良か？入れ墨とか・・・まあ、すげいことに変わりはない。

「あ、思い出した。さつきの入れ墨があつたパーティーのこと。」

有名なのか？」

正直、なんとなくだがあいつらは危険な感じがした。

「あいつらの中学校は、超エリート、天明中学校といってな、エスカレーター式のところだ。」

「へえ、ヤフーは雰囲気が全然違ったよね。なんか怖かった！」

咲楽ちゃんも感じたのか。

まあ俺も成績は良かつたからな。
足元にも及ばないことはない。

「でだな、入れ墨があるやつらは特に成績がよかつたやつなんだ。
ほとんどの高校から推薦がきてるはずだ。」

つてこの高校そんなにすゞい高校だつたんだ！――

この先、ちゃんと生きていけるか心配になつた。

入学試験と拷問3（後書き）

半端な終わり方ですみません…
読んで下さった方、ありがとうございます。

入学試験と拷問4（前書き）

4話目です。よろしくお願ひします。

入学試験と拷問4

はあ、疲れた。

なんだこれ、ただのアスレチック的なものじゃねえだろ！・・・つてか、

「同じじところをぐるぐる回つてゐる気がする。」

「そうかな？」

「俺もちよつと天神と同じことを考えていた。奇遇だな。」

なんだ、蓮もか。

「なんか印でもつけておくか？もしかしたら同じところをぐるぐる回つてるかもしれないからな。」

「おっそれならわかりやすいしな！」

「でもそれじゃあほかの人にも気ずかれちゃうよ？先に行かれちゃうよ？」

うーーーーん・・・・・・

「あつーそこにさつきの天明のやつらがいるじゃん！..」

「の人たちについていけば何とかなるんじゃないかな？」

「そうだな。たまにはできるじゃねえか。」

「たまにつてなんだよ。まだ少ししか関わってねえじゃねえかよつ

！..

「・・・・・・・・・。」

シカトしやがつたこいつ・・・・・・・

とことんムカツク野郎だなこいつ・・・・・・

「お前、とにかく天神野郎だなこいつ……。とか思つてないよな?」

「思つてませーん!…」

「やつぱり」こいつ読心術使えるだろ!…。

「よし、あいつらから田を離すなよ。」

「わかつたー!…! 巻君かつ!」

「おい、それ考えたの俺だし!…!」

俺も咲楽ちゃんにかっこいいって言われたいし!…! ゆりーぞ!…!

「おー! 天神、ぼーーっとすんな

はつ俺としたことが!」

「あ、あの人たち、なんかあそこをずっとひまわりしてゐる。」

「? あそこて、ただの行き止まりじやん。」

ん?あれ?あいつら、何かを探してゐ?

天明の人たちは、一枚の板を押した。
すると、床の板が落ちて、下に行つた。

「!? なんだありやあ!?」

「ただの仕掛けだろ。そろそろほかのやつらも『氣づき』を始めているな。

「じゃあさつと行つちやおー!…! レッジバー!…!」

どうやら達はさつき天明の人達がいたところに走つていつた。

「たしか、こゝへはまだつたはず……」

ガコンツ

正義の精神

• • • • • • あれ？

ガニンツ

ガコンツ
ガコンツ
ガコガコガコガコガコガコツ

なあ・・・・・何も起こらないぞ?」

「うん、そうだね。」

う・・・・・うたるもとをうたう

どうろは頭を抱えて取り乱した。

「まあ落ち着けって。これと同じような行き止まりはほかにあつただろ?」

「それを手当たり次第、さうきみたいに板を押していけは何とかなるよつ！」

蓮、咲楽ちゃん・・・・・

「応つ！...『ゴール目指して頑張ろうぜー！..」

どくろは珍しくキメ顔になつた。

「ふん。お前が頑張るうと頑張んなくとも必ずコールする。」

うふふ。一緒にモールしそうね。(モルシ)

も言つたけどほぐれたらどうするんだ！」

「お前のせいがつねれこーー。」

「ちがえよーー。」

なんだよこいつー！俺にばつかりつつかかつてきてよー。

「二人とも本当に仲がいいねえ」

卷之三

「なんでパーティーに入れたんだよー！幼馴染だからって性格悪すぎ

ちよつとかつこいいからつて調子に乗るなよ！

俺のほうがかつこなくて愛らしくて素直だもんねっ！

「お前、心の中で俺を馬鹿にした挙句、咲楽ちゃん、皿皿皿贅つて何？」

「自分で自分で褒める」とだよ。」

「へえ～そつなんだ。つじやなくて…」

「ちびーよーこや、そつじやなにけど、ええええと・・・・そ、
そうだよー俺は自分のことを褒めました！褒めまくつました！なん
か文句あつかー！」

「さうか。そのことについては特に文句はない。だが、じゃあ俺を
馬鹿にしたことにつけっては？」

「かなり馬鹿にしたぜ！性格が悪くて、ちよつとかつここからつ
て調子に乗つてるってなー！」

「はあー？いつ俺が調子に乗つたんだよー。」

「さつきからずつとじやボケエー！」

「意味わかんねえよー。」

「あああーーもひじりねえーーじひこでもなつちまえー。」

「一人とも、喧嘩はやめよひよ。」

「咲楽ちゃんがなんと云おつと構つかー！」

「もおいーー知るかーー俺一人で行くーー。
「どくろ君、一回落ち着いひよ」
「落ち着けるかー全ては蓮のせいだーー」
「はあー？なんでだよーー」

・ そうだ、全ては蓮のせいだ。俺がせつかくやる氣を出してここのこと
・ ・・・。

「おい、お前希咲先生の話、ちゃんと聞いてたのか！？パーティー全員でつゝ「俺は先に行くからなー！」

そつ言つと、どぐろは足早にその場を去つた。

「はあ・・・・・。つたく、どんだけわがままなんだ。天神どぐろつてやつは・・・・。」

続く

入学試験と拷問4（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。
これからどう君はどうなってしまうのでしょうか（笑）

入学試験と拷問5（前書き）

5話目です。

入学試験と拷問シリーズがやけに長いですね。
よろしくお願いします。

入学試験と拷問5

「つたく、蓮のやつ、ほんと腹立つなあ・・・・・
もともとあいつが悪いんだ。もひどくなつても知らん。

「えつと・・・行き止まりを探せばいいんだつか。」

「えりは、担当たり次第に行き止まりを探した。

「・・・・・じつよひ、ぜんぜん見つかんねえ・・・・・

やばこやばこやばこ。じつよひ。

・・・・・不覚。

こんなときには咲楽ちゃんと蓮の顔が思い浮かんでしまった・・・・・。

「これって完全に迷つたんじゃえか?え。嘘。マジー?・・・じつよひ。

「

なんで一人で飛び出してしまつたんだろう。

ちゃんと咲楽ちゃんは心配して・・・・・あれ?

そういえば蓮もちゃんと忠告してくれたよな・・・・・・はぐれた
らどうするつもりだ!つて・・・・・

「はは・・・・・はは・・・・・ははははは・・・・・。」

結局全部俺のわがままだつたんじゃねーかww
そう、やる気とかいろいろ言つてや。
ふはははは。なんか笑えてくるぜー。

なんだつけ、そういうえば遙先生がなんか言つていたはず……
はつっ……！

「ホールは全員でたゞり着かなきゃいけねえんじゃねえかよ……。」

たしか蓮もそういうこと言つてた気がする……。

なんだよ……全部蓮が言つてたじやん……！

・・・・なんか悔しい。

今頃咲楽ちゃんと蓮は必死に俺のこと探ししているだろうなあ。

「うし！ 行くぜー待つてるよー咲楽ちゃん……蓮つ……！」

どくひがそう言つた瞬間、

「その必要はないぞ。バカ。」

「ふふ。ほんなどこにいたんだ。探したよ？ 迷子のおバカさん。」

上から蓮と咲楽が降りてきた。

「え？ 蓮？ 咲楽ちゃん？」

「つたぐ、勢いよく飛び出したと思つたら、200メートル以内にいるとは思わなかつたぜ。」

「けつこう遠くまで探したんだよ？」

咲楽ちゃん、蓮……。

俺…………俺…………幸せ者だoooooooooooooo

！！

「うう、ごめん。わがままで、自分勝手で……。
「いや、俺こそきついことを言つてしまつたな。」

「喧嘩両成敗だねつ！」

「ああ、そうだな。

俺、このパーティでよかつたああああああああああああああああ！

「うわっ！鼻水垂らすなバカっつ！汚ねえ！！」

アーチーの冒險

۱۵۱

「一せー」と落ち着いたが、

どうやらはさつきまで涙と鼻水が止まらなかつたのだ。

「ほら、やつさといくぞ。だんだん人が少なくなつてきてる。」

「すまん。涙と鼻水の2TOPが止まらなかつたんだ。

ちょうど目の前に行き止まりがあつた。

「説小治政」

「よし、そこに乗れ。じゃ、押すぞー。」

ガコンッ

「...」

「うおっ...」

「あやっ...」

ものす』スピードで落ちていく。
下にはあつとこゝ聞についた。

「早かつたな。」

「そうだね。」

「うん。」

なんか、さつきの楽しかったな。ガコンッっていう感じ。

「よし、行くぞ。天神、さつきみたいなこともうすんなよ。」

「わかつてゐつつーのー。」

しばらく歩いていくと、丸太一本があつた。

「え?」こを歩くの?」

咲楽ちゃんの顔が青ざめている。

「大丈夫か?咲楽。」

「全然大丈夫じゃないよお・・・・・。こわいよお・・・・・。」

こんなこと思つるのは失礼かもしれないが、怖がつてガクガクしてい
る咲楽ちゃんはすごくかわいい。

「ふえ？」

蓮がひょいと咲楽をお姫様抱っこした。

「ず、ずるこぞー！…蓮つつー…！」

「はあ、ちゃんと飯食つてないだる。肉食え。肉。」

「ちや、ちゃんと食べてるモン！」

なんだこの二人との関係は・・・・・。

は、入れる気がしない。一人の間に花が咲いてるぜ。

「れ、蓮。その状態で行くのか？」

「あたりまえだろ。」

「す、少し恥ずかしいけれど、巻君なら安心できるし、信用してる
るんだつー！」

NOおおおおおおおおおおおおー…！…！

破局

なんなんだ。あの二人の間にあるものはーー！これがお世ななじみと
いうやつかー！

べ、べつにうらやましいとか思つてねーしぃー

そんなんー＝リも思つてねーしぃー

「？ 何変な顔してんだ。」

「べつべつにー。」

「ふーん。じゃ、行くぞ。」

うわ、意外と怖いぞこれ。

え！？なにスイスイ進んでんのー？蓮のやつー！

「咲楽、下、絶対に見るなよ。見たらお前、必ずといつほど暴れるからな。小さいころ、お前のせいで落ちたからな。」

からな。小さこじか、お前のせこで落ちたからな。」

「あ、あれはかなり怖かつたんだもんー。ショウががないじゃんー。」

くそ、イチヤイチヤしやがつて。

あ、もう少しで終わるな。余裕余裕！

「結構長かっただな、この丸力」

おう！言わなくてもがんばってるNEEN---

ズルツツツ

「ナニアニハニ！」

「ルーモー？」

卷之五

パシイイツフ

間一髪のところで蓮はじかわの手をつかんだ。

「う・・・・ん。大丈夫か?」

咲楽ちゃんは田をきらめかせている。

「何ガン見してんだよ。咲楽。」

「いやあ、なんかこうこうのかつこいつがあつて思つて!—」

「ありがとうな。蓮。

「ふん、当たり前なことをしたまでだ」「

「この本は、卷頭。

「だつ 誰が照れるか！！」

照れんなて

方正思林

それから坂を上つたり、一枚の板を渡つたり、ロッククライミングみたいなのもやつた。

「このアスレチック的なもの、すぐ手が込んでるよな。」

「つかれたあ！」

おー? あれは!...まさかの!?

「モードル……だな。

「ほら、最後はみんなでゴール！だよね？」

あたひまた

みんなでいっせいに「ゴールへ足を運び入れた。
ゴールに待ち構えていたらしい遙先生が、

「150組中64位……か。なかなかいい成績だな。「ゴールや
つしたやつらは面接に行っている。そこにある紙を持つていけ。入
り口から出ですぐの曲がり角をまっすぐ行け。一番奥の部屋が面接
室だ。」

そつと話しつゝ話を終わらせた。どうやら質問は受け付けないらしい。

続く

入学試験と拷問5（後書き）

多分けつじつ長く書いた気がします。
読んでくださってありがとうございます。

直接と繋がる道（前書き）

5番目です。今しきへお願いします。

面接と帰り道

面接はあついたりなものだつた。

なぜこの高校に入ろうと思つたのかとか、この高校に入つたら何をしたいのかなどなど・・・

天神どくろはただ一つ気になる質問があつた。

「君は、死ぬ覚悟がありますか？又はどんな困難にも立ち向かうことができるですか？」

え？何その質問。

「どうせやの質問にすぐ答えられなかつた。

なんか非日常なことが起つてゐるのか？」の高校は、まあどうあえず・・・

「場合によってはできると思います。」

面接官はこの答えに少し驚いたらしく、少し眼を見開いた。

え。なんか変な考え方したかな。ただでさえ怖い顔つきなのにこれらに怖くなつた気がする・・・。

「（ボソッ）普通の人ならばすぐに死ぬ覚悟ありますー」とか、できますっ！って答えるのにな・・・。」

なんかつぶやきました？え。なになに。気になるんですけど。

「ふあああああ！……緊張したああああ……」

5メートルくらいから、

「アーネスト」

九月三十日

「咲楽ちゃん！…と・・・・・蓮！…！」

何であいつもいるんだよっ！…いや、べつにいいけどね。

「どうだった？ 緊張した？」

「超怖かつたーー！目つきが悪かつたーー！」

やっぱり怖かつたよね！！

「じゃ、私達家こっちだから。バイバーイ」

ブンブンと手を振っていたので、どうも手を振り返した。

やつぱりかわいいなあ・・・・。咲楽ちゃん。

俺はこれから起る数々の困難を知る由もなかつた。

続く

面接と帰つ道（後書き）

短いですね。

そうです。平均的に文字数が少ないんですね。
読んでくださつてありがとうございます。

合格発表といきなり明後日（前書き）

7話目です。
よひしくお願ひします。

合格発表といきなり明後日

天神どくろは今、ドキドキしそぎて死にそうです。

朝起きてからも、なんかパツとしないし、電柱に頭を12回ぶつけました。

それから、今田正一さんはこの日が合格発表の日なのです。

やばい!
実際にやばい。

送 て し 手 た

つけまくつて、意識が朦朧として……いやいやいやいや、

待つて。
別に言い訳なんかじゃ
・
・
・
・
・
・

・・・・・
・でかおきから俺は誰に何を言っているんだ
二六

う。

見たこともない景色に動搖を隠せない。まるで知らない世界に放り込まれたような、一步も踏み出せないあの感覚。しばらくすると、後ろから聞いたことのある声が聴こえてきた。

よかつたああああああああああああああああ！！俺は一人じゃないんだああ

「お前、おれか迷ったな？ どうせ一いつとしだらうとなといわへ来てしおつたんだろ？ せば、お前ひっこな。」

お前に俺の何がわかる。全部当たつていのけど。

「つたく、咲楽もあそこで悶々しているナビよ。」

「えー！ まじで！ ？ 咲楽ちゃん！ ？」

どうは一気に復活した！

「ふえ？…どうして？」

「久しぶり！！元気でやつてたか？」

卷之三

「ツル、タリタシ、ケル。」

しみへり歩へヒ、あああ高校（仮）についた。

「…」セイジは黙って立っていた。

目の前を見ると、すごい人の数がひとつの中間に集まっていた。
どくろ達は、ものすごい人の数を搔き分けて、合格者発表が書かれてある紙を見た。

「アーネス。」

蓮と咲楽も自分の番号を見つけたようだ。
蓮が、

「とりあえず人のいないところへ行こう。ちょうど近くに公園があるだろ。そこに行こう。」

「うん。」

「そうだね。」

・・・

「じゃあ、俺から言つぜ。俺は・・・・・合格だった。」

「おお！…さすがだね！…」

「おめでとう！…」

「次は咲楽。」

咲楽ちゃんは・・・・?

「私も合格だつたよ！…」

「よかつたな！…じや、次は天神。」

「俺は・・・・・。」

全員が息を呑んだ。

「合格だ。」

まさかどうが合格するとは思つてなかつたのか、蓮と咲楽は驚きすきて声も出せない。

「おーおこおいおい。ちょっと…何かしゃべるーぜ……じうけるなよ…！」

「いや、まさかお前が合格することは思わなかつたんだ。」

「ちょっ…失礼なつ…！」

「実は私も…・・・・・。」

「咲楽ちゃんも…？」

そんなにも俺がバ力に見えたのか？失礼すぎだぞ。一二人とも。

「合格者が持つていけるパンフレットはもつてきたな？」

「うん…！」

「もちろん…！」

全員、パンフレットの一ページ田を開いた。

～合格者のみなさまへ～

合格おめでとうござります。

あなたは本校の生徒確定です。入学試験の内容は、誰にも話さないでください。話した方は、それ相応の罰を受けていただきます。本校は、完全なる全寮制です。家には許可をとらないといけません。さて、説明はここぐらいにして、ここから大事な話になります。入学式は、明後日とさせていただきます。今日と明日で荷物を全部まとめてきてください。忘れ物をしても、取りには行けません。制服などは、こちらで配ります。

9：30 登校時間

10：00 入学式

保護者は同席できません。

持つてきていけないもの

- ・盗聴器
- ・盗撮器
- ・携帯電話
- ・刃物
- ・銃
- ・パソコン
- ・ゲーム機
- ・音楽プレーヤー
- ・録音器具

校門で持ち物検査をします。

「なんだこりや。」

「どつかの組織に狙われてるのか?」

「なんだか恐ろしいねえ」

つてかなんなんだ。入学式が明後日なんて。早すぎだろ。
それも設定が恐ろしそうだ。この高校。いや、高校じゃねえな。
多分。

常識じやありえないし。

なんだか非日常なことが起つてどうな予感がしてたれ。

続く

会場発表といきなり明後日（後書き）

やっとキャラが定まってきた感じがします。
読んでくださってありがとうございました。

入学式と校長先生のお話（前書き）

8話目です。
よろしくお願いします。

入学式と校長先生のお話

今日は入学式。

持ち物チェックは100回以上したと思う。忘れ物をしたら大変なことになるからなーー！

「よしつ！行くかーー！」

家には一人。母ちゃんは離婚して今はバツ1。パートで頑張つて働いてくれている。

・・・・・こんなリア充な話は置いといて、今日も誰もいない家に行つて来ますを告げる。かなり重い荷物を持つてドアを開ける。

・
「よつ！咲楽ちゃん！蓮つーー！」
「あ、どぐろくん、やつほー。」
「ん。ああ。」
しばらく歩くと、長い行列ができていた。

「持ち物検査か。かなり長いな。」
「大丈夫かなあ。私。」
「大丈夫だよ。」

10分後

「まだか?」「まだだね。」

それから30分後

「まだなのか?」「遅いね。」「長すぎじゃね?」

それから5分後

「やつとか。」「すぐ待ったねー」「半分寝てたぜ。」

持ち物検査は、かばんやリュックの中身はもちろん、ポケットの中や衣服のいたるところを調べられ、金属検査もさせられた。

すぐ警戒してるな。怖い怖い。

たしか合格者数は450人中100人だけだったな。
俺が入れたことは奇跡なんじゃないかっていまさら思つ。
ま、いまさらそんなこと考えたって何にも変わりやあしない。
そういうしているうちに持ち物検査は終わっていた。
おかげさまで誰も引っかかるつていない。

・

廊下にはクラス分けの紙が貼り出されていた。

「あつ！－俺と咲楽ちゃんと蓮、同じクラスだ－！」

「何組だ？」

「1 - Bだつてさ－よかつたね！」

「早速行こうぜ－！」

「あんまり浮かれるな。恥ずかしい。」

一年生の教室は廊下を右に曲がってすぐあった。

「あつた！ 1 - B。」

「お、寮のメンバーが黒板に貼られているぞ。」

すぐに黒板に駆け寄った。

「えーと・・・・・。どれどれ？」

0008番室

黒斬ハクくクロギリ ハク>

天神どくろ

巻蓮

細燐渚くサイサン ナギサ>

0322番室

鑑紋ライトくカンブン ライト>

春色咲楽

女子 A

な・・・・なんかすこ
！（自分もですけど）
読めないし！

「どこの誰だか知らないがなんかキャラが濃そうだな。」「ライトちゃんかあ。きっとかわいい子だらうなあ。」

この後、制服に着替えて、入学式の準備をした。

「生徒、入場。」

パー パラ パパ
チャ ラリ ラ チャ ラリ ラー
入場の曲

だいだいの流れが終わつた。どくろが半分寝かけていたところに、
はきはきとした声が響いた。

「生徒代表。黒斬八ク！」

ん？まさか・・・・・あいつか！－寮が一緒の！
・・・・・つてあれ？見たことのある・・・・・天明の奴らの
うちの一人か！！

短髪の赤マフラー！

かつかけー。マジかつかけー。生徒代表とか。

「校長先生の話。赤白躊躇くアカシロ ツツジハ校長先生お願いします。」

やべえ。校長先生。超美人じゅん。

「えー。あーあーあー。生徒の皆さん、はじめまして。赤白躊躇です。皆さんは、選ばれた生徒です。この高校の名前こそがステータス！なのです。この高校の勉強は、あんまり世間一般な勉強はしませんが、資格はたんまり取れます！そつ、この高校は特殊だから！皆さんには、この高校で生活する以上、探し物を搜すという、大事な仕事をしていただきます。詳しいことは、まあ、担任の先生に聞いてください。命にかかる仕事もあるかもしだれません。それでは、終わらせていただきます。」

校長先生は美しい礼をして、盛大な拍手とともにステージから下りた。

ていうか探し物を探すのに命にこことがあるかもしれないってどういうことだよッ！！

続く

入学式と校長先生のお話（後書き）

やつと題名を絡んでもらいました。
読んでくださいありがとうございました。

高校生活と寮生活のこれから（前書き）

9話です。
おねがいします。

高校生活と寮生活のこれから

自分の席は好きなところに座つていいそうで、一番後ろの席に、左が蓮、真ん中が咲楽、右がどくろといふ席になった。

「担任の希咲遙だ。よろしくな。」

やつた！遙先生じゃん！ラッキー！

さっそく教科書などが配られた。かばんは机の横にかけられていた。

「ナニコレッ！超薄いじゃん！」

小学校の教科書より薄いよ、この教科書。

「この教科書は必要最低限に覚えることしか入っていない。たとえば、数学の教科書は計算の方程式や図形や記号のことしか書かれていない。多分。しかし、英語や科学の教科書は分厚いぞ。科学は、薬品とか爆弾などの取り扱いについてとかはしつこく書かれている。覚えるのは大変だが、貴様らは選ばれた人間だからな。」

うえ、英語とか無理。嫌い。

「あ、校長先生の話であったが、「探し物」という仕事について、だ。」

そういうと、どこからか取り出した、大きな紙を、黒板に貼り付けた。

「このような、S・A・B・C・Dランクの仕事に大きく分かれる。この後組んでもらうが、三人一組のパーティーで、この仕事をこなしてもらひ。これは仕事だからな、ちゃんとあとで報酬は出るぞ。探し物の仕事を簡単にこなすには、いろいろと資格が必要だ。無線機とか、危険物取り扱いとか。ちゃんと取つていたほうがあとで楽だぞ。」

これって強制的ですか？

「ま、貴様らは初心者だからな。最初はDランクから始めるんだな。資格はいろんなのが取れるからな。最初にとつておいたほうがおすすめだ。S・Aランクになるとまあ、人殺しがでるかもしけんが、あんまり仕事で人を殺すなよ。死体処理とかあとで大変なんだからな。」

ひつ！人殺しだあ！？じやあこつちからも死んだ人とか出てくるんじゃないのか！？ええ！？マジナンナノ！？聞いてねえよ！…ええ！？帰りてえよ！本氣で！！

「次は寮についてだが、基本4人で一部屋だ。これはかつてにくじ引きで決めさせてもらつた。あくまで文句なしだぞ。なんていつたつてくじ引きだからな。」

ええ――。くじ引きであんな怖そうな人達と一緒になるんですかあ！？あるいみ奇跡だよね！？

「ここには食堂もあるし、いろいろ設備が整つてるし、なんたつて、そこらの高校より断然広い。あ、大事なこと話すの忘れてた。朝、9：00までに教室に着席している。食堂が開いているのは、朝は6：00～8：30、昼は11：45～1：00、夜は7：00～

9：00だ。購買はいつでもあいている。消灯時間は12：00だ。
いつまでも起きているなよ。朝の訓練はよほどのことがない限り毎
朝5：30からだからな。このときは先輩も混ざっている。ふふ、
先輩は恐ろしいぞ。殺氣立っている。食堂は先輩達が去つてから
いつたほうがいいぞ。怪我したくなきやな。」

はいっ！！俺は怪我したくありません！！！痛いのは嫌いです！
つてか、先輩どんだけ恐ろしいんですか！？先輩の権力か！？

「まあ、ついでに教えておこう。1年生は黄色のネクタイで、100人だ。2年生は白のネクタイで89人だ。3年生は赤のネクタイで74人だ。2年生や3年生は1年生のころ、ちゃんと100人だったんだ。と、いうことは・・・・・? 足りない人数はどこに行ってしまったんだろうな(ニヤリ)」

ちょー！！！」の高校生はいって！！！わいって！！！帰りたい！！

「おい。お前、なんちゅー顔してやがる。」

レノンの歌

一
だめだ。
せんせん聞こえてねえ。

あとから聞いたけど、パソコンとケータイとマイクとイヤホンと時

計と無線機とあと・・・・・なんだっけ。まあ、いろいろなもの
が渡されたらしい。
・・・・・ってかその前に俺は今、危険な状態になつている。
そう、今は寮の中。そしてベットは一段ベット。どちらが上になる
のか話し合つてこりこりだ。

しばらくの沈黙。

おい。誰か何かしやべれよ。全然進まねえじやねえかよ。

「これは、公平にじきんけんでいいよな。」

よくやつた！！蓮！！

「あ、その前にあれ、右側のベットがいい。」

「ジサム、三日後にはお詫びの使者が来る」

「同意する。」

ニヨツシヤああああああああーー

「じゃあ俺は蓮とじゃんなんすれどー、一応だよな。」

「アーニー、アーニーだ。」

「うみへん」

「うーん、いいね。」

「『じゅんけんワポン』…」「

・・・・・勝つた！！

「ちつ俺が下かよ

ちなみにあちらのほうはハクが下で、渚が上だった。

このあと、『飯を食べて、無事に就寝することができた。

続く

高校生活と寮生活のこれから（後書き）

知らない人達と生活するって緊張しますよね。
読んでくださいありがとうございました。
多分。

授業と初めて繋がった」と（前略）

10回目です。
ありがとうございました。

授業と初めて気づいたこと

昨日、自販機に蓮と一緒に行った時のことだ。

「なあ。Jの高校つてなんか、すげー変わってるよな。」

「なんていふたてスハイや殺し屋を一ぐる集成所みたしんど」
だからな。」

「え！？そ、そうだったのか？全然知らなかつた！！初耳！！」

？お前以外のやつは全員知ってるぞ！」

「マイジでー?」

マジかよ。全然知らなかつた。なんせ都市伝説しか見てなかつたからな（キリッ）

「ん? ふあああああ。朝か。」

どくろは田観まし時計のスイッチを押した。

「おーい。蓮。起きたか?」

じくわは蓮のまつに行つた。

「おこ。起きあひて。」

「うるさい。」

イラッ。こつ、朝弱いほつだな。

どくろは蓮の布団を剥いだ。

「つーーー何をするーーー返せーーー。」

ドタン バタン

「ふー。やつと起きたか。」

「ちつ。田覚めから最悪だ。」

イリッー。せつかく起きてやつたのーーー

「せつせつジャージに着替えて朝の訓練行つ。わかつた?・蓮

「・・・・・。」

シカトかよ。

やつと蓮は準備が整つて外に出た。

「まつーみんなもつ集合してゐー。」

「せつだな。」

「こつ・・・・・。低血圧で朝、機嫌が悪いめんどくせえやつだ

な。

朝の訓練は、校庭を10周して、体操をするだけだった。

「意外と楽だつたな。」

「だな。」

どんつ

「うわ。すみません。」

やべえ。先輩じやん！

「いや、本当にスミマセンンテシタ！」

その先輩は笑顔で、

「そんなに怖がらないでください。余所見をしていた俺も悪いんで
すから。」

眼鏡をかけた先輩はそう言つた。そして友達と思われる人のほうへ
走つていった。

「よかつたな。優しい先輩で。」

「おう。死ぬかと思った。」

ドスッ

後ろから背中を押された。

「おはよう一巻君、エベエベ。」

咲楽ちゃん！朝から咲楽ちゃんを見られた！イヤッホーイ！

「よつ。同じ部屋のやつはどうだ？」

「すうじく優しい人たちだよ。」

このあと、食堂で超豪華な朝食を食べた。

「授業だあああ。」

「だな。」

「たしか一時間田つて科学だよね。」

教室のドアが開いて、科学の先生が入ってきた。

超ヒヨロくて鉛筆みたいな奴かと思つたけど、超じつにじやん。

「授業を始める。まず、ノートと教科書の2ページを開け。」

ペラリ

な、なんじやーつやー文字だらけーーそれと少しの図。

「えー。今日の授業は爆弾についてだ。」

いきなり恐ろしいの勉強するんだな。

「昔は、凝つた時限爆弾や解体しにくい爆弾が流行っていたが、今は、携帯電話で遠隔操作できるような簡単な爆弾だ。昔の技術も必要だが・・・・」

こんなのがわかるかああああああああーーーーー

きつと蓮や咲楽ちゃんもわかんないだろーーー

どくろはひひと右を見た。

な、なんだとー？一生懸命メモってるだとー？
うん。きつと大事な事なんだろつな。俺はスパイにも殺し屋にもなる気はないけど。

キーンゴーンカーンゴーン

「これで授業を終わる。話したことば全部、重要なことだからな。

やつとおわったー

「ふう。楽しかった！ね、どくろ君。」

え！？あの授業楽しかったか？

「あとで、どのくらいの火薬で人が一人死ぬのか質問しよう」と。

怖いよ。咲楽ちゃん。目がぎらぎらして。

「やつと全部終わった――！」

「おい、食堂行くぞ。多分、先輩達は食べ終わったこいつだ。

「そういうえば朝からハク達を見てないよな。」

「俺はわざとトイレで見た。」

廊下を出で、一番奥の右の角を曲がると食堂だ。

「なんだ？ やけにぞわざわしているな。」

「なんか問題でもあつたのかな。」

食堂を見ると、人が白目を向いて倒れていた。
その、倒れていた人の前にハクがいた。

「ハク！？ 何をやつて……」「何調子こいてんだ！――この一年――！」

渚に向かつて3年生が右手を振り上げた。

渚は右によけて、両手を固めて、相手の頭に振り落とした。

「ぐあっ――」

そのまま氣絶してしまった。

渚はそのまま続けようとしたが、

「その辺にしどけ、氣絶した人の見分けもつかないほどバカではな

いだろ。」

ハクが止めた。

食堂には、ハク達が怖いのか、人がいなくなっていた。

「どくろ君たちは行かなくていいのか？俺達は人を氣絶させたこの中で一番危険な人間なんだぞ。」

ほら、もう帰るつぜ。な、蓮。

と、どくろが目で訴えかけた。

「別に。黒斬達は喧嘩をふっかけられたから自己防衛をしただけだろ。」

「そのとおりだが・・・・」

どくろはたまたまこんだて表が目に入った。

おっ。晩飯カツカレーじゃん。

「蓮。今日カツカレーだぞ。」「食べる。」

ハク達は、少し驚いた顔をして、いつ言った。

「隣で、食つてもいいか？」
「もちろんOK！――！」

そうだよな。同じ部屋にいる奴に何ビビッてんだ。
でも、やっぱり喧嘩はよくないぞ。怖いから。

続
<

授業と初めて気づいたこと（後書き）

今回は少し戦闘シーンが入りましたね。爆弾に関しては、ガンスリンガーガールを書き写しました。

表現力ないので、わからないと思います（笑）

読んでくださいありがとうございました。

鑑紋ライターと春色琴葉の生活（前書き）

11話です。

よりしへくお願ひします。

ライターをナイトで書きます。

鑑紋ライターと春色咲楽の生活

同じ部屋になつた、春色咲楽つて子・・・・。

腹立つ。

あたしの嫌いなタイプだわ。

なんかあ、フワフワしてるしぃ、のろまだしい、見てるだけでイラ
イラするするんですけどお。

「はあ。疲れる。」

「そうだねっ！」

別に独り言だからあ、返事しなくていいんですけどお。
ああもう！－－イライラする！－－

ライターは早く荷物を片付けて、ベットに転がつた。

「あ。あたし、ベットにいるからあ。」

誰も返事しない。

ふん。そんなのもうとつぐに慣れてるね。

前の学校もそんなもんだったから。

ほかの女子なんて、キャーキャーわめぐだけのおしゃべり人形。
だから成績も上がらないのよ。天明の名にふさわしくないわ。

「じゃあ私、ライターちゃんの下でー。」

「はあ！？」

あ、ありえない！－－今まであたしなんかにかまつてくる奴なんかい
なかつたのに！－－

それに、気安くライタちゃんとか呼んでるわけえ！？

普通、鑑紋さんとかライタさんでしょー！？

あ、そーカ。こいつ、普通じゃないのか。

「あ、ごめん。ダメだつたかな？」

「べ、別に。そこがいいんだつたらそれでいいんじゃない？」

「うん！私、ここがいいー！」

変わった奴。

よかつたわね。女子A・女子B。あたしのドジやなくて。

ほら、何だか嬉しそうね。

さつきまでヒソヒソと「やだあ。」とか、「なんであこいつと同じ部屋なの。」とかぐだめいてたくせー。

そりやあ、あたしだって嫌われていることぐらいわかってる。

でも、誰かと関わると、よけい傷ついてしまひ。

あんなこと・・・・・・。もう・・・・・・。

「ハライタちゃん！一緒に食堂で飯食べよう！」

いやよ。

あたしはハクさんや渚さんと一緒に食べたいの。

あ。でも今日、用事があるとか言ってたわね。

そうね。今日だけ。

「いいわよ。」

「やつたあー！」

なんであたしと食事をするだけでそんなに嬉しそうするのよ。

うざこわ。

あたしを知りうとしないで。

「今日の晩御飯はバイキングだつて……」

「そう。」

「ケーキもいっぱいあるよ……」

「よかつたわね。」

「ライトちゃんはケーキ好き?」

「甘いものは何でも好きよ。」

「ああー、うるさいわね……！」

よこからペチャクチャペチャクチャ！

「嫌いな食べ物とかある?」

「漬物と生臭いもの。」

「お寿司とか食べれる?」

「無理よ。」

あたしの好き嫌いとかどうでもいいじゃない……！
でも・・・・・。

ケーキ・・・・・食べたい。

チョコレートケーキ、ショートケーキ、タルト、モンブラン、ショーラ、フルーツケーキと、アップルパイもあるのね。

「早く行かなくちゃ。」

「ライトちゃん?」

ライトはケーキのある方へ早足で向かった。

おぼん2個にパリッピード状に、各種類のケーキを乗せてくる。合計
56個。

そして、おぼん4個にチョコレートケーキとショートケーキとタル
トとショートをホールずつ乗せた。

「うわあ・・・・・・す、こ量だね。」

「ケーキが好きなの。」

咲楽のおぼんの上には味噌汁とわかめご飯、漬物と玉子焼きと天ぷ
らとこつ、和食でバランスのよいものだ。

「先に食べててもいいわよ。別にビーフしてもあなたと食べたいって
わけじゃないし。」

「ひ、ん。ライトちゃんが来るまで待ってるよ。」

本当にびっくりいいの。

あたしのことなんてほつておいて食べかけになさいや。

ライトはアールグレイの紅茶に砂糖をおおさじ3杯入れた。
咲楽はちゃんと食べずにライトのことを待っていた。

「なんだ。まだ食べてなかつたんだあ。もつとひへに食べないと
思つたのこい。」

「ちゃんとライトちゃんが来るまで待つてたよーふふつ。」

「ち。なんのよ。こつ。

「せ、。食べ」「いただきます。」

「ライトはシートケーキにフォークを刺した。

「ライト？」

「この声は…………！」

「ハクさん？」

「ハクさんだわ！…渚さんもいるわ！…

「ハクさん、今日は用事があるって言つてませんでしたっけ？」「もう終わりましたよ。渚がやけに手際がよくてね。」「腹が減つたからな。」

「ああ、ハクさんも渚さんも今日も相変わらずお綺麗ですわーー！

「じゃあ、私達はあちらで食事をしてきます。ライトはお友達と食事をしているようですから。」

「とつ！友達じゅありますんつーーー！」

「うう。こんなじつ、友達じゃないわつーー！」

「そうですか。それでは。」

ハク達は去つていった。

「ねえ。ライトちゃん。」「何よ。」

さつきの、友達じゃないって言ったこと、怒ってるのかしら。でも、あなたのせいでハクさん達とお食事できませんでしたのよ。

「なんで敬語使ってるの？」

「…・・・・はあ？」

「敬語使ってるのがダメなのかしら？」

「いや、同じ学校だし、そんなに親しいのになんで敬語使つていいんだろうなーって思つて。」「

そんなこと、どうでもいいじゃない。

「知らないわよ。親しき仲にも礼儀ありつてことじやない？」

「そつかー。」

嘘よ。タイミングがわからなかつたのよ。
痛いことを質問しないでくれないかしら。

ライトは、咲楽に話しかけられても無視し続けて食事をした。
見事にケーキを食べ終えて、ライトはハク達の所に行つた、

「ハクさん、渚さん。」

「ライト。何のようですか？」

「ハクさん、バレませんか？」

「うん。大丈夫ですよ。」

よかつた。もしバレたら大変なることになるから。

「マフラーは欠かさずしていくくださいね。寝ているときも。」

「わかつていますよ。」

「渚さん。ハクさんを守つてくださいね。ハクさんには誰も近寄らせ
ないでください。もしものことがあつてからでは遅いのですから。」

「承知した。」

「本当に心配性ですよね。ライトは。」

「あたしはハクさんが大好きなのですから。恋愛感情じゃないです
けど。」

そう。あたしはこれ以上失うわけにはいかないから。

続く

鑑紋ライターと春色映画の生活（後書き）

いろいろと疑問があると思います。

ハクの秘密について、ライトの過去についてなどなど。
まあ、それはのちのち書きます。

読んでくださいありがとうございました。

あの日の食事と意外なアレ（前書き）

12話です。
よろしくお願ひします。

あのときの食事と意外なアレ

「隣で、食つてもいいか?」

え、全然かまわないけど。

つてか隣で食べるつもりだつたんだけどね。俺。

「OK!...!..!

ハクはほつとした表情をした。

「ほり、早くしろ。カツカレーが冷めてしまつ。」

「どんだけ楽しみなんだよカツカレーが。」

「カツカレーは好きな食べ物ベスト10に入つている。」

ま、カツカレーはかなりおいしけどな。

「渚も好きだよな。カツカレー。」

「好きだ。」

なんで渚つて口が少ないんだろう。
しゃべるの、苦手なのかな。

「いいにおい～！ヤバイ。早く食べよ!せーつておい、まだ待てよ
蓮!今にも食いそうだぞ!」

「・・・・・早く食べたい。早く早く早く早く。」

「待てつて。あと少しだから。」

「よし。こちらも準備はできたぞ。」

「じゃ、せーので行くぞー。せーのっ」

「「 いただく 「 全ての動植物と ・・・・ 」

なんだこの差は・・・・・！

さすが天明出身。お坊ちゃんって感じかするぜ。

蓮が戸悪一さん

「でか食事の挨拶が全ての動植物と……で始まるとか漫画でしか見たことねーからー！」

「「「「「 いただきます。」」」」」

熱々のカツカレーを口に入れる。

「アツツー、つまつー！」

「うん。いまこな。」

「君は愚鈍だもんば。ふふう。その頃久しごつこ見やう。

渚、全然熱そうに見えないし

見たか？俺のリアクション。渚から見たらありえないだろ。

「だからあ、昨日のはたまたまよ！予定が合わなかつたからしちゃう
がなくあなたと食事をしただけ！それ以上の何物もないわ！わかる
？さつきから同じこと言つてるじゃない！」

「二年、今はお嬢さんへ貰ひたい。」

「あふ？ 話し声が聞こえなしね
人かいないのかしら？」

おつー咲楽ちゃんと・・・・・誰?

「はじめまして。あたしは、鑑紋ライトよ。あなた達はハクさんと

渚さんと同じ部屋に住んでる…………え、と。

「巻蓮君と天神どくろ君ですよ。」

「えい…そのよつ名前でしたわー！」

いや、その名前ですけど。

つてかこいつさ、性格悪そう。さつきもなんか咲楽ちゃんに対して態度悪かつたし、ハク達を見た瞬間性格がコロッと変わりやがった。嫌な奴。これが男好きって奴か。

「ところであなた。」

「え、俺？」

え、なになに。怖い顔で睨むなって。

「あたしはハクさんの隣で食事がしたいと思つてるんだけど。」

・・・・・で？

俺にだけひつていうことか？

「ライト。食事をしている人にだけとは失礼ですよ。」

「でもう！…………わかりました。あなた。先ほどは失礼なことを言つてしまつて、申し訳ないと思つてるわ。」

「は、はあ。」

そんな棒読みで、しかも無表情で言い、心もこもっていない侘びを言われても困るんですけど。

それも名前も呼んでくれない（笑）

「それではあたしは、ハクさんの田の前で食事します。」

「じゃ、私はライトちゃんの隣で！」

おい。そんな嫌そうな顔するなよ。
咲楽ちゃんがよくても俺はよくない。

「あ、私、部屋に財布忘れてきちゃった。売店で買いたいのあったんだよね。取りにいくつてくれるね。」

咲楽は財布を取りに走つて部屋に戻つた。

「なあ。鑑紋ライトつていう奴よお。咲楽に対してもうとばかり、いや、ちょっとでないな。すぐ態度が悪くねえか？」

「なんですか？」

蓮！？

「せつときから咲楽に対する態度が悪いつてんだよ。」

直球で言つたな。俺、どうなつてもしうねえかい。

「あたしからも言わせてもらひながら、正直、あたしもあの子に迷惑しているわ。」

「はあ？ 咲楽はお前に迷惑かけてねえだろ。」

「あたしは迷惑なのよ！ あたしに関わつてくるし、しつこく付きまとつてくるの！ それがあたしは嫌なの！ 嫌つて言つても何度も繰り返すの…」

「ライト、そこまでにしませんか？」

「黒斬、お前は入つてくるな。」

「入つてくるなんて言われても、ライトは私の親しい人だからそれは無理だ。」

え。これヤバイことになつてません？

喧嘩のフラグ立つてません？怖い怖い怖い。

「咲楽は中学生のとき、友達がいなかつた！いつも一人だけど、二コ二コしてたぜ！！それが、初めて友達作ろうと思つて話かけた奴がこんな態度が悪いやつたら咲楽がよくても俺はイラライラしてたまらない！」

「そんなの、あたしには関係ないわ！」

咲楽ちゃん、そんなつらい過去があつたんだね。
おさななじみの蓮しか頼る奴がいなかつたんだな。

「私さあ、そつちの都合のいいように言いくるめられることが大嫌いなんだよな。こつちの事情も聞こうとしない。そうだろう？自分のはうがかわいそうだ。不幸な人なんだって、悲劇のヒロイン気取られても困るぜ。」

あれ？ハク、なんか雰囲気変わったか？

オーラが入学試験みたいだぞ。

「お前らは天明のトップだろ。別に嫌なこともないだろ。全てが充実してんだろ？」

「充実なんかこれっぽっちもしてねえよ。」

え？本当に？リア充していないの？マジで？

「ライトはな、お母さんがお父さんを殺害、預けられた家でも家庭内暴力、学校ではいじめを受けていたんだ。最悪だろ？そつちとは比べ物にならないくらい。」

沈黙。

そして、喧嘩の原因となつた人物が現れた。

「あれ？みんな、まだ食べ終わつてなかつたの？財布搜してて結構遅くなつたのに。」

・・・・・咲楽ちゃん、今回の喧嘩の原因はあなたのおかげですよ。

俺なんかビビッちまつて全然しゃべつてない。
空氣読んでください。オネガイシマス。

「咲楽、売店でなんか買え、飯は別なとこひるで食え。」

咲楽は雰囲気をなんとなく察したのか、

「うん。わかつた。メロンパン買ひ。」

何でメロンパンを買ひことを宣言したのか意味不明なんですけど。
メロンパンつておいしいよね。どちらかといつとチョコチップメロンパンが好き。

「殴り合ひの喧嘩でもするか？」

「お互い、どちらも譲らぬようならば構わないが。」

ええ～。殴り合ひの喧嘩つて・・・・。やつぱりこいつなる感じ？

びくろは一応1メートルその場から離れた。

どちらも同じタイミングでその場から動いた。

蓮は、足を引っ掛けよつとしたが、ハクはジャンプしてかわし、かかとおとしをした。

だが、足を掴まれ、下段回し蹴りをされた。

これ、全然殴り合いの喧嘩じゃねえじゃん！！

ただの漫画に出てくるよつた戦闘シーンだよね！？

仰向けになつたハクの上に、蓮が乗っかり、マウントパンチを繰り出した。

マウントパンチとは、仰向けになつた相手の上に乗り、その状態から繰り出すパンチのこと。

だが、ハクはそのパンチを寸のところで避け、蓮の腕を掴んで後ろに投げた。

うわーなんちゅー腕力！！常人じゃねえ！！

蓮はすぐに立ち上がつたが、肘打ちからの左フック、そしてボディフックを蓮の腹部に当てた。

「グツ……」

蓮は、倒れこみそうな痛みをこらえて、体制を整えて相手の動きを見た。

ハクは中段を蹴り、素早く上段を蹴る、一段蹴りをしたが、すべて避けられてしまった。

「はあっ……」

蓮は首投げをしようとしたが、ハクの上段回し蹴りによつて防がれてしまつた。

「ぐつそおーー！」

その一瞬の隙を、ハクは見逃さなかつた。

蓮にタックルをして、足で首を締め上げ、三角締めをされた。

「ぐつーー！あーー！」

「痛いよな。痛いに決まつてる。閉め技だからな。」

そのまま蓮は氣絶してしまつた。

「喧嘩を売つた割には案外そうでもなかつたな。」

どくひは蓮に駆け寄つた。

「おいーー！大丈夫か！？」

「無駄だぞ。氣絶してるからな。」

くそーー！俺はビビッて動くこともできなかつたーー！

「さすがですわーー！すごく強いですわーー！完璧ですわーー！」

「じゃ、私は帰る。行くぞ。ライト。・・・・・はあ。渚、お前、この状態でカツカレーを5杯も食べていたのか？」

渚の横には食べ終わった皿が5つ重なつっていた。

「かなりおいしかつた。」

どくひが見たのは、蓮が咲楽に対する、ハクがライトに対する、それぞれの愛だつた。

続
<

あの日の食事と意外なアレ（後書き）

戦闘シーンを書くときが一番楽しかったです。
まだまだ謎が多いですが、がんばって書いていきたいと思います。
読んで下さり、ありがとうございました。

戦闘中の蓮と決意（前書き）

13話目です。
蓮サイドで書いていきます。
よろしくお願いします。

戦闘中の蓮と決意

咲楽だつてつらい思いは経験してんだ。
俺は全てを知つている。

ずっと咲楽を見てきてから。

咲楽・・・・・俺は・・・・・

蓮は1発殴りうと動き出した。

しかし、相手も動き出したので、体勢を崩そつと足をかけた。
ジャンプでかわされ、かかとおとしをされた。
肩にぶつかる前に足を掴んだ。

くつ！重い！

足を掴まれたら動けないだろ。
隙があるのは・・・・・足！！

左足を蹴り、ハクに馬乗りになつた。

くらえ！何発も殴つてやるよ！—

しかし、かわされ、床に拳が激突した。

ちつ！かなり反射神経がいいなこいつ！

左手でまた殴りうとしたが、腕を掴まれ、後ろに投げられた。

動けない！—くそ！—何だこいつの腕力は！—
だが、ダメージはない。こんなの、すぐに起き上がり反撃すれば
・・・・—！

起き上がった瞬間、顔に激しい痛みが襲つた。
やっと殴られたことに気づいたとき、腹部に重い何かが激突した。

な・・・・・。重いつ。

鉄球か何かか？いや、素手だよな。

こらえろ、耐えるんだ！！

くそ、余裕な顔しやがつて。

腹立つんだよおつ！！

蓮は脅威の集中力を發揮した。

素早い足の動きを避け、反撃しようとした。

俺は！弱くない！なのに・・・・何で避けられてしまう！
動きについていけない。クソッ！－クソ！－！！！

情が動きに出てしまっていたのか、隙ができてしまった。

腹部に突撃され、押し倒されてしまった。

三角締めを、無駄な動きをせずにかけられてしまつた。
耳元に、囁くように透き通つた声がした。

「蓮君、私はすゞぐガツカリした。情に流されてこんなに動きが鈍るなんてな。戦いに集中しなきや。負けてるからって熱くなるなよ。あくまでポーカーフェイス。私も少し熱くなつてしまつたけどな。

ふふつ。」

女のような声だった。

そして、蓮はそのまま気絶してしまつた。
少し意識があるとき、蓮はこう決意した。

俺は・・・・・絶対に・・・・・強くなつて・・・・・みせ

る！！

続く

戦闘中の蓮と決意（後書き）

圧倒的な強さですね、ハク。
マジかっこいいです。憧れちゃいます。
読んで下さり、ありがとうございました。

すべての暴走と喧嘩の裏面 (前書き)

14 頁目です。
よろしくお願ひします。

さくらの暴走と喧嘩の幕開け

あの食事の後、さくらは蓮を部屋に連れて行った。

「くわ。 なんで『氣』を失った奴は「んなに重てえんだよ。」

蓮は今、ぐるりにねどられた状態だ。

メロンパンを食べ終わったのか、食堂に咲楽ちゃんが来た。

「さくら君、何やつてるの？」

見てのとおり、蓮をおんぶしてくるの。

「お前、何でそんなにボロボロなの？ 我じりるよな？ 何があった
よね？」

「いや…………その…………。」

「答えてよーーー何があつたのーー？」

怖いです。今までなく怖いです。

「うふうふ、あの…………喧嘩つてこつか…………。」

喧嘩の原因になつたの、咲楽ちゃんなんですかーーー何で俺が怒鳴
られなあやこけないのーーー？

「わざと部屋に蓮さんでーーなにチンタラじつさんのーー？」

「すみません…………。」

え。なんかこれおかしくねえか？

やつと蓮を運び終わると、咲楽が質問した。

「なんで喧嘩になつたの？」

「言えない……咲楽ちゃんが喧嘩の原因なんて言えない……
言つて、咲楽ちゃんに何かあつたら、蓮に殺される……
でも言わないとなんだか殺されそう……
俺、これこそまさに八方塞つてやつじやね？」

「言えないの？ 私に言えない事なの？」

「はいっ……言えません……！」

「ねえ。何でやつから返事しないの？」
「なんか、言つちやいけないよつな気がするんで。
「ますます聞きたいんだけど。」
「かわいい……かわいいけど言えなによ……
言つひやつたら咲楽ちゃん、絶対傷つくし……」

「…………じめん。言えない。」

「やつか…………」

「本当にじめんなさい。」

「じめん…………」

全身全霊で「メンナサイ…………」

「巻替、起きないね。」「やうだな。」

今頃、ハク達何やつてるかな。部屋にも帰つてきてないよつだし・・・・・。

「痛いよな。顔、腫れてるぞ。せつかくのナイスガイが台無しだ。」
「？何言つて・・・・・・。」「ちよっと、ふりつとびつかにつてくるから、蓮の」と、ゆりこへ

やつぱ、蓮は友達だから・・・・え? いつ友達になつたのだつて? そんなもん、俺が勝手に決めた! ! ジャあもう一回。やつぱ、蓮は友達だから、俺も同じ痛さを味あわないとなー!

「ちよっと、ふりつとびつかにつてくるから、蓮の」と、ゆりこへ
頼んだぜ! !」「ちよつと、ひきつとびつかにつてくるから、蓮の」と、ゆりこへ

ものすゞースペードでビヘン走つて行つた。
バタンつ

思い切つよく部屋のドアが閉まる。

誰もいない廊下でばたばたと足音が響く。

つてかれ、あいつら行きそうな所とか知らねえし! !
どうするよ。困るんですけど。

つてか、学校中探し回ればいつかでバッタリするんじやね?
よおし! ! それじゃ、行くか! !

廊下の角を曲がった瞬間、誰かにぶつかつた。

むにょん

むにょん！？なんだここのやわらかい感触は！！

とつむにょんは相手の顔を見た。

え・・・・・・？

校長・・・・・先生？

「こんな時間に何をやっているのかな？それも、廊下を走って。」「す、すみません。」

「それと、さっき私の胸にぶつかった事に関しては？」
「本当にすみませんでした！..」

さつきぶつかつたのは胸か！？ラッキー！？
って俺は変態か！？そうだな。変態だな。

「君は、何かを探しているのかい？」

「え、まあ。」

「君の探し物は、私についてくればあるかもしれない。」

「え！？本当ですか！？」

「本当だ。ついてくるのかい？」

「ついていきます！..」

やつた！走り回る手間が省けたぜ！..

いい人だ！校長先生！..

つて言うかなんで、ハク達を捜していることがわかつたんだろう。
まあ、とにかくすごい人なんだろうな。校長先生っていう人は。

どくろがたどり着いたのは、校長室だった。

「え？ 校長室にいるんですか？ ハク達。」

「君の探し物はハクちゃ、ゴホン！ ハク君達のかい？」

「そうですけど。」

「そうかそうか。 それでは、入つてもよいぞ。」

校長室のドアはかなり立派で、かなり重たかった。

「かなり重たいじゃありませんか！！」

「そうか？ もう慣れたからね。 このドアに。」

「すげー！ 校長先生！！

やつと全部開いて、中に入った。

「すげえ！！ 超広いじゃん！！

校長室の中は、赤と黒で統一された、52人のお相撲さんが入つても大丈夫だと思えるほど広々としていた。

ほとんど、本棚と、ティーセットが入つてている棚で埋め尽くされている。

床には、読み終わつたまま、しまつていない本がちらほらと積み重なつてゐる。

真ん中にある、ソファーと共に、ハク達がいた。

驚いた顔をして、こちらを見ている。

「はあ。 蹣躅校長先生、なんでごくろ君を連れてきたんですか。」

「なんとなく、探し物を捜していると思ったから・・・悪かったのかい？」

「かなり悪いわ。」

「それはすまなかつた。私はほつては置けない性格だからね。」

校長先生と親しい関係なのか？
かなり親しく見えるけど。

「君達には感謝していただけなければいけない立場にあると思つん
だけどねえ？例えば、この部屋を使つてもよいといふのもううだし。
」

「え？ マジか？ いいな！ こんな広々としたところを使わせてもううて
るなんて！！

「あと、ハクちゃ、「ストップ！！」これ以上話さないでいただけます
？ これを知らない人がここにいるんですわよーー？」

すみませんね。いちやいけませんでしたか。

「おお。すまないすまない。これは失言だつた。」

「相変わらず口が軽いな。校長は。」

「渚、そういうわけでくれよ。これでも極力抑えていくつもりなん
だよ。」

「そうそう。つ・も・り、ね。」

「それは皮肉だな。うーん。口口で言つちゃあつかなあ。」

「ダメですわーーあなたも大変なことになるんですわよーー！」

「冗談だよ。」

「渚、ライト。私を危険な田にさらさないでくれないか？」

「なに俺の知らない話を話してるんだよーー！」

全然ついていけねえよーー！」

「す、すみません。」

「悪かつたな。」

つていうか、

「俺の話を聞け！！」

迷惑そうな顔でごくろの方をハク達が見る。
そんなこともお構いなしに話を続ける。

「俺はな、ハクと喧嘩しに来たんだ！！」

「君、何を言つてるんだい？」

「日本語だ！！」

「すみません。躊躇校長先生。こっちのトラブルです。」

「ふーん。そうか。」

そう、俺はハクと喧嘩しに来たんだ！！
危ない危ない。忘れるところだつたぜ。

続く

むぐるの暴走と喧嘩の幕明け（後書き）

むぐるが暴走しましたね。

一人で、勝手に（笑）

読んで下さりありがとうございました。

すべての暴走と疾走（走書き）

15番目です。

喧嘩しに来たと宣言したとたん、周りの空気が変わった。
ピコピコとした感じの空気。

「蓮君の敵討ちか？そんなの、無駄だ。」

「違う。できれば敵討ちしたいけれど、俺はハクに勝てない。そんなの、とっくに知ってる。」

「じゃあ、どうして。」

決まつてゐるだら、そんなの。

「蓮と同じ痛みを味わう為に來た……！」

しばりくの沈黙。
からりの爆笑。

「くくくく……君、バカじゃないのかい？ハハハッ……！」

何で爆笑されてんの？俺、変なこと言つたか？
え。超恥ずかしいんですけど。

渚も顔を隠して笑つてゐるし……

「あんたさあ、もしかしてドムー？ありえない……！」

な、ドムだと！？

「ちづーよーなんで俺がドムになんかならなきやいけないんだよ……！」

「いや、言動からしてどうだら。ブツーふふつ。」

ハクウウウウウウウウウウウウウウ！－！－！－

爆笑すんな！！お前は喧嘩相手なんだぞ！！

みんなの思考は、

痛みを味わいたい＝痛いのが好き＝ドMを、3秒間の間、頭に思い浮かばせていた。

「さあ。喧嘩をしよう。思いどおり、蓮君の痛みを……いや、それ以上を味あわせてやるよ。アーヴ君。」

カチンコ

「俺はアマジやねえつってんだろーー！」

どくろはハクに向かつてダッショウした。

そのまま殴ろうとして、勢いをつけたが、ハクは左に避けた。どくろは、あわてて止まつたが、勢いを付けすぎたため前のめりの状態になつて、転びそうになつた。

ମେଲିବାରୀ

「ずいぶん余裕だな。相手に背を向けていられるなんて。」

しまつた！！

と、どうかが思つて、前を向いたとした瞬間だった。

「かつこいいの、見せるからなー見とけよー」「きましたわー！」

な、何だ？

どくろが前を向き終わる前に、ハクはバック投げをした。バック投げとは、プロレス用語でいう、ジャーマンスープレックスのことである。この技をかけられた相手は、脳天から落ちていくことになる。うまくいけば首の骨が折れる。

どくろの視界が、急に歪んだ。

ハクの両手の握りが甘かつたせいか、後ろに放り投げられただけだつた。

「いって・・・・・。何が起こつた？」

「よかつたな。俺の両手の握りが甘くて。そうじゃなきゃ、お前は首の骨が折れて多分死んでたぞ。」

ちなみに、首が折れて死ぬ原因は、息ができなくなつて死ぬか、神経が切れて死ぬかのどちらかである。

ハクはわざと手の握りを緩くしていったのだろう。

「そのまま倒れたままでいいのか？」

「い、今起き上がるうとしたところだよーーー。」

今頃どくろは閉め技をかけられていたところだらう。

「完全になめられているねえ。本氣を出すまでもないつて事かい？」「そうだと思いますわ。」

くそつ！…強すぎる！…

なんだこの圧倒的な強さは！…

俺が弱すぎるのもあるけど、立ち向かえなくなる強さだ！！

「ルーナが…。」

どうろは闇雲にパンチをした。

当然たるはずもなく、受け止められていた。

「ふしぎ」

ハクは中断回し蹴りをした。

何だこのスネの硬さ！！

左の脇腹をハクは狙つた。
どうくちは完全になめられているので、右の脇腹は、狙わなかつたの
だろう。
右の脇腹には肝臓があり、そこに中断回し蹴りがヒットすると、致
命的ダメージになる。

「嫌な性格してるよね。ハク君。じわじわと痛みを『えているなん
てや。くくく。」

「ハクさんを侮辱しないでくださいます？ハクさんは嫌な性格なん
てしてませんわ。」

くつねお！なめやがつて！—
でも・・・・・立ち上がれねえ。
くそつ—！

足が震えてやがる！－蓮はこんな奴と戦つていたのか－！

ハクは、思いつきましたはずのどくろの腹を蹴った。

「うぐっつーーー！」

「どくろ君は、これでおしまい、なのか？」

「体が・・・・・思ひつけ・・・・・動か、ねえんだーー！」

見下ろしたままの状態で、どくろの顔を蹴る。

「ぐつーー！」

「痛いのが、好きなんだろ？」

「別に、好きじゃねえよー！」

「そうか。楽に逝かせてやるよ。」

ハクはどくろの後ろに回りこみ、のどを叩いた。

どくろの視界が揺らいで、頭のてっぺんが痛くなるような感じになる。

そして、どくろは氣絶した。

「終わりました。躑躅校長先生。」

「見ていて愉快痛快だつたよ。ハクちゃん。」

「その呼び方、やめていただけませんか？今は男といつ設定なのですから。」

「バラしちゃ駄目なんだろう？」

「当たり前ですわ。もしもバラしたりしたら・・・・・・わかっていますよね？」

「わかつてゐよ。警察に私に偽りの容疑をかけて逮捕をせる。そのあと、牢屋に爆弾を仕掛け、牢屋と私、少しの人もろともドーコーン。でしょ？」「

躊躇は西半でゾーンを表現した。

「といひでハクちゃんってどうだよな。
「よく言われます。」

続く

心への暴走と喪失（後書き）

自分で書いててハクのどうぶりに怖くなりました。
どうしてこうか、もはやヤンデレの域に行っちゃった気がします。
読んで下さりありがとうございました。

やつ場のなごりのイハシキと朝の訓練（前書き）

16話題です。
よろしくお願ひします。

やり場のないこのイラッキと朝の訓練

ざわ・・・・・・・ざわ・・・・・・

なんだ？朝から騒がしい・・・・・のわあ！？

どくろは玄関前のフロアにある、銅像につるされていた。
下には、人、人、人。

ちょっ！待つて！何でこんなことになつてんの！？
昨日の夜、ハクと喧嘩して、氣絶して、それから・・・・・それ
から・・・・・何でこんなことになつた！？

絶対えあの校長先生かライトつづーやつのせいだ！！
つていうか、みんな見てないで降りしてよ！－頼むから！－
俺、高所恐怖症なんだよ！－「え－よ－－本気で！－

ガラツ

銅像の近くの窓が開いた。

「君、何をやつてるんだい？」
「え？」

あつ！あの人だ！朝の訓練のとき、ぶつかった人だ！－すごく親
切な人！－

「ほら、こっちにおりで。そこからなら、この窓にも届くだらうへ
す、すみません。」

どくろは窓に飛び移つた。

「あ、ありがとうございます。」

「はあ。びっくりしたよ。あんなどころに人がぶら下がってるなん
て。」

「俺も驚きました。朝日が覚めたらあんなことになっていたとは思
いませんでした。」

「はい。わかりません。」

だれか一部始終見ている人がいたのならば教えてほしいくらいだ。
まあ、あいつらしか知らないと思うけどな。

「君、名前は？」

۱۰۷

い今までお君にて呼ぶのは 変だと思つてね

「僕は桜井戒斗くサクライ カイト>。2年生だよ。」

憂しハ先輩ニニニハたああああああああああああ

優しすぎるだろこの先輩！！男でも惚れてしまうわ！！

どうせ心の中で号泣した。

「じゃ、業は先に朝の訓練に行くよ。じゃあな。

「はいっ！」

どうも朝の訓練に行く準備をしようと、自分の部屋に戻った。

「蓮？ 傷、大丈夫か？」

「ああ。とりあえずな。つて、お前も顔、ひどいぞ。」

「え？ あ。昨日、ハクと喧嘩したんだ。」

「はあ！？ 何でだよ！？」

「うーんで、そのまんま叫びやけたら、またドMだつて爆笑されんだろつた。」

特に蓮だつたら氣持ち悪いとか言こ出すから、

「絶対言わねえ。」

「へえー。何で。」

「何でつてーーー。言つたら蓮に氣持ち悪いとか言われそうだからだよーーー。」

「じゃあお前は、俺に氣持ち悪いとか言わせれるような理由でハクと喧嘩したんだな？」

「ぐつーー強い。口喧嘩強い。

「ああそりだよーーーそんな理由で喧嘩したんだよーーー。」

「気持ち悪い。一度と俺の前に姿を現すな。」

「何でだよーーーそれあまりにもひどすぎるだろーーー。」

「冗談だ。」

「うーん

「ほひ。早くしないと朝の訓練に遅れるぞ。」
「わあつてるよーーー蓮に言われたくねえよーーー。」
「やうか。」

今日の朝の訓練は、体育館だった。
朝の訓練の担当が、

「今日は、適当な相手と~~相手~~の技のみで試合をしてもらひ、「…試合の相手は俺が適当に決めるからな！…！」

了解しましたあ。せめて弱い相手とさせてくださあい。

「ルールは、俺が危険だと判断した場合、~~セイ~~で試合終了する。」

え。無理無理無理無理！！

軽く逝くから！…俺！！

「最初は仲居と吉田一。」

1年も2年も3年も関係なく本当に適当に決められていく。

「次つ！黒斬と畠山一。」

「「はいっ」」

ハクだ！よし。しつかり見る。

「試合開始！…」

まず、最初に動き出したのは畠山だった。

左順突きをして、間合いを取る。ハクは、後ろに避けた。

間合いを取ったところで、畠山が膝蹴りを仕掛ける。ハクは、相手の左手が下がり、守りが甘くなつたところを、カギ突き（フック）をし、怯んだところを逆突き（ストレートパンチ）をした。

見事、顔面に的中し、畠山は倒れた。

「試合終了！ 勝者、黒斬！」

ハクは涼しい顔でその場を去つた。

「すげー。」「早すぎー。」「かっこよくない？」「強おー」

周りの人たちが口々にしゃべりだす。

「次つ！ 細燐と遠藤！」

「はいっ！」「…………はい。」

「試合開始！！」

渚が最初に動き出した。

前蹴りをして間合いをとる。

前蹴りは当たらなかつたが、素早く切り替えた。

遠藤は、間合いを詰めよつと寄つてくる。

渚は動かず、じつと遠藤が詰め寄つてくるのを待つている。

おいつ……のままじゃやられるぞ……渚つ……

遠藤が攻撃を仕掛けようとした瞬間、渚が動いた。

「せつ…………」

素早い動きで下突きをする。

みぞおちに命中した。

朝の訓練の担当が危険と判断した。

「そこまで……試合終了……！」

「まだじちらも倒れてないだろ。」「何で終わりなんだよ……。」「

早くねえか？」「

遠藤はふりつと体育館の中庭に行き、嘔吐した。

「すげえな。3年吐かせたぞ。渚。」「

「強すぎだな。ヤバイくらい。」

ざわざわと周りがさりげに黙がしくなる。

「やべえよ。今年の1年生。」「超危険じゃん。怖あー。」「同学
年にこんなのがいるなんて……。」「

続く

やつ場のなごりのイカシキと朝の訓練（後書き）

朝の訓練の続きを17話田に書きます。

多分ハクは試合が終わってからドヤ顔で帰ってきたでしょうね。

そこでライアに「かっこよかったですわーー。ですがですわハクさん
！最高！！」

とか言われてんだしあうね（笑）

読んで下さりありがとうございました。

やつ場のなごりのイカシキと朝の訓練2（前書き）

17話目です。

16話の続きです。

よろしくお願ひします。

やつ場のなにこのイラシキと朝の訓練2

しばらくして、蓮の名前が呼ばれた。

「次つ…巻と田中…！」

キタ━━━━━━━！

「じゃ、行つて来るぜ。」

「おう！頑張れよーー！」

田中といつ男は、体つきががっちりとしていた。
たまたま近くにいたので、田中のほうから話しかけてきた。

「俺は6歳^{じろく}から空手をやつてたんだ。負けるわきやねえよ。」

こいつ、初対面のくせにございぶんと態度でけえな。
腹立つ性格してやがるぜ。

蓮は田中を無視した。

「ちつ。シカトかよ。一発目がましてやる。」

「大丈夫か？蓮。」

「大丈夫だ。ああ言つていい奴ほどそんなに強くない。」

田中は聞こえていたらしく、さうに機嫌を悪くしていた。

「試合開始つ…！」

田中はいきなりカギ突きをかましてきた。
蓮はそれをあっさりと避けた。

「ふん。口先だけじゃないってことか。
「しゃべっている余裕があるのか?」

蓮は間合いで取つて、一段蹴りを中段でした。
田中の脇腹に鋭い痛みが走り、わずかの間、痛みに気をとられてしまつた。

そこを蓮は見抜き、上段を蹴つた。
だが、わずかにかするだけだった。

「威嚇のつもりか?それとも足技が使えるのを自慢したいのか?」

田中の挑発に蓮はイラついた。

それが田中のミスだつたのかもしれない。

蓮はハイスピードで上段回し蹴りを繰り出した。

蓮は左利きなのだが、右構えにして、接近したときに左構えに変えたのだ。

そこに田中は幻惑して、その隙を利用して左の上段回し蹴りをしたのである。

それも、美しい回し蹴りで、軸が崩れてなかつたのだ。

「ぐふうつーー！」

田中は倒れた。

「試合終了ーー！」

蓮と田中ははじから戻ってきた。

「お前、案外強いじゃねえかよ。」

「お前、案外弱いんだな。」

田中はイラツキを顔に表した。

挑発したくせに何もできずに負け、弱いと言われれば腹立つだろ。

田中は蓮と離れた位置に行つた。

「蓮つて、嫌な相手にはことごとく性格悪いよな。」

「そうか?」

「そういえば、咲楽ちゃん見かけないよな。」

「寝坊じゃないか?」

心配だな。昨日だって蓮の看病で遅く眠つたと困つ。

「お前、咲楽の心配してないで自分の心配もしきよ。
「ずっと疑問に思つてたんだけど。」

「何だ?」

「読心術使えるだろ。」

「さあな。」

何その反応!!

え、使えるの?使えないの?

「その前にお前、空手できんのか?」
「多分出来るさ。」
「出来ないのか。」

そう。空手なんかやつたことない。

「どうしよう。」「

「知るか。」

「ヤバイ！――どうしよう――本気でやばくない！？」

「だから知るか。」

「ひどいよ！――こんな周りにいっぱい人がいるんだぜ！？恥ずかしいちゅーの！――」

「お前、朝の一件でもう恥ずかしいことになってるだろ。」

え？蓮知つてたの？

じゃあ早く助けるよ！――

「お、遅れですみませんでした！――」

咲楽が体育館に走つてくる。

「なんだ。本当に寝坊だったのか。咲楽。」

咲楽がぐるり達の方に気がついて駆け寄つてくる。

「いやあ。恥ずかしいね。寝坊とか。えへへつ。」

ヤベエ！――

急いで準備してきたせいか、寝癖ついてる……かわええ！――

「最後、天神と春色！――」

「ええ！？」

そんなつ。

咲楽ちゃんを殴れるか！――

「よかつたな。お前。

「一九、九月二十一日、

「アーニーの誕生日が近づいてるんだよ。

「アーティストの癡狂」

卷之三

マジでえーっ

「ほり、せつねと行け。」

どういは驚きながら行つた。

「試合開始！！」

咲楽が一言、言つた。

「どうぞ君、ごめんね？」

「え？」

ドゴッ バキッ ドスッ

3秒の間に試合終了がかけられた。

「アーティスト・オブ・ザ・イヤー」

続
<

やつ場のなごりのイカシキと朝の訓練2（後書き）

“えへねと咲楽の試合のシーンは省略させていただきました。
書くとなんか同じ感じになりますしあつたんですね。　おい　ｗｗ
読んで下さりありがとうございました。”

『アヒルの生活』(前編)

1884年1月

じへひへ蓮の蓮生活

（み基本休み）（田羅口は基本休み）

「ハ。ア。

た子へひは課題をせきかした。蓮に話かした。

「お前、課題終わらせてねえだら。」

「当たり前じやん。」

「やれよ。」

「せだ。めんどい。」

「俺は溜めとこて、あとで頑張るまうなんだけ。あーハマだヒマだヒマだヒマだ。なんか面白いことないかな。」
ヒマめて死ぬ。

「課題、題向匡たつけ。」

「塩酸の予習と風船爆弾の復習。それと英語のプリントとペブル。

「めごくべくさつ……」
「量がある……！」

「今ビンぐりい進んでる?」

「塩酸の予習と英語のプリント。今、風船爆弾の復習もついてる。」

「進むのはえーな。」

「爆弾とかめんべくせーじ。」

風船爆弾とか、水素ガスがビリのじうのしか聞いてねーよ。
たしか、高度が低下すると、どっかの部品が縮んで電熱線が……
・・・・なんだっけ。忘れた。

「じゃ、俺はパズルから始めよつとー。」

どくろは勢いよくベットから飛び降りた。

かばんの中をぐるぐるとして、一分くらいかかるて、ようやくパズルを見つけた。

「あつあつた。」

俺のかばんの中、汚すぎー！

どくろは床に寝転がつてパズルを解き始めた。

パズルは、レオナルド・ダ・ヴィンチの代表作、モナ・リザだ。
箱にレオナルド・ダ・ヴィンチの解説が付いていたが、どくろは思いつきりそれを見なかつたことにした。

箱からバラバラとパズルを取り出して、作業にかかつた。

「何これ！！超細けえ！！」

これ見てれば絶対目がショボショボしていくぜー！もう無理だし。
やる気無くすわー。このパズル。

どくろは嫌がりながら作業を始めた。

まずはつながるところからつづけて、はめるといつ地道なといつから始めた。

「えつ・・・・・・とお、これがここでえ・・・・・・あれ？はま

「んないしー。」

「くつそ。全然進まねえ。」

「こんなん一年かけても無理だつづーのー。」

今度は、手当たり次第適当なところにはめていった。

「お、これ以外といけるかも。」

「全然違うところだぞ。そこ、田だから。何で背景のところにあるんだよ。」

「えつ。マジで。」

つていうか何でわかんの蓮。こんな細けえのー。」

「とりあえず、パートだけはめておくから後は自分で頑張れよ。」

「おおーーありがとな、蓮ーー。」

蓮は手早くピースを各ペースごとにはめていった。

でもさ。俺、わかんない。全力で。

30分経過

「だああああーー無理ーーやつてられつかーーー。」

「全然進んでねえじやんーー！」

「だつてさ、わかんねーもんーモナ・リザとか、意味わかんねーしーーー！」

「パズル 자체意味わかんねーだろ。」

パズルとかさ、仮面ライダーとかのピースが大きいパズルしかやつ

たことねえもん！！

小学生以来やつてねえし！

それからまた30分経過。

びへりは寝ていた。

ル ム
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ 。
リ パ
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
ズ
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・

「たぐしうがねえな」

蓮はとっくに全ての宿題を終わらせていた。

「うんなん、ラクシモーで終わるか？」「う。

手際よくピースをはめていく。

そして、モナ・リザがうかびあがつた。蓮はぐくろの体を揺らして、起こした。

「んがつ！？ん？パズ・・・・・ル・・・・・。」

「だから俺がやつて『やっぱ俺は天才なんだな。イヤツホー——
——イ——!——!——!』

プチツ

蓮の何かが切れた。

「だあああかあああああらああああーー俺がやつたって言つてるだ

ろつがああああああ！

「ああ！！パズルが！！」

蓮はじくろのパズルをひっくり返した。

じくろはそのあと、大変な思いで、宿題を終わらせたといつ。

続く

べへひと蓮の寮生活（後書き）

私も宿題は溜めるほうですか（笑）
読んで下さりありがとうございました。

授業と蓮の行動（前書き）

19話です。
まいしくお願ひします。

授業と蓮の行動

体育の授業

「今回の授業は、柔道をやります。畠を敷いてから、準備体操をしてください。畠はあそこにあります。」

体つきのゴツい先生が指をはじく、言つた。

「男子は緑色の畠、女子は赤い色の畠を敷いてください。」

体育館をはだしで歩くと足の裏にじみがつくんだよなあ。ああ。水ぬつつつねつ。

じくろは緑色の畠を持った。

意外と重い。

蓮は軽々と持ち上げて、運んでいった。

「隙間をつくらないようにして敷いてくださいねー。足の指を挟んで骨折したら大変ですからねー。」

体育の先生が全員に聞こえるように言った。
3分ほどで、畠は敷き終わった。

「では、今日は柔道のさまだまな技をやっていきます。巻君、相手をしてください。」

「はい。」

「背負い投げをしますので、よく見ていてくださいね。」

あー。蓮なら逆に投げるだらうな。

「では、こきますね。受身もしつかり・・・・・・え？」

ドサッ

あ。投げたな。蓮のやつ。

「先生。受身、忘れてますよ。」

「あ、ああ。まさか投げられるとは思わなかつたんだ。」

「油断しないでくださいね。いつ殺されるかわからないんですから。今、完璧に俺に殺されましたよ。」

「やつだね。気をつけるよ。」

あーあ。完全に田えつけられたな。蓮の奴。

「巻君のように、適当な相手と背負い投げをしてください。」

体育の先生の図面で、全員が動き出した。

蓮が戻ってきた。

「蓮。何やつてんだ。」

「背負い投げ。」

「いや、それは見たからわかるけどよ、先生投げただろ？」

「投げた。だつて自分が投げると思つて油断してるから投げてやうつて思つて。」

だからつてマジで投げるか？
すげえな蓮。マネできません。

「背負い投げ、練習すつや。」

「ねつ。つてか、多分俺がずっと投げられると思ひなさう。」

「ちやんと練習させてやるよ。」

どくろは蓮を相手にして、素早く体を沈め、相手のふところに入り込む、打ち込みを何度も反復して繰り返した。

ちなみに、背負い投げの動作は、左手を掴んでいる相手の袖を上げ、えりを掴んでいる右手を離す。右足は、相手の斜め45度前に踏み込む。次に、上に上げた袖を前に引っ張り、右手は相手の脇の下に通すと同時に、素早く回転して相手を背負う。一本背負いだ。

「動きが遅い。もつと早く。」

「これでも頑張ってんだよーーー。」

やばい。これ。腕辛いし！

どくろは腕の痛みに耐えながら、頑張って練習を続けた。

体育の時間が終わり、休み時間となつた。

「蓮っ！…そ、うこえは・・・・・・？あれ？ど、行へんどう。」

蓮が教室と逆方向の所に行く。

「まあ。いっか。」

後で聞いておいつ。

続く

授業と蓮の行動（後書き）

短くてすみません。

急用ができてしまったんです。続きを20話に書きます。

本当にすみません。誤字、脱字、意味がわからないところがあったらすぐに聞いてください。

読んで下さりありがとうございました。

授業と蓮の行動2（前書き）

20話目です。

19話目の続きです。

よろしくお願いします。

授業と蓮の行動2

授業の始まりの1分前に蓮が教室に入ってきた。

「蓮、何やつてたんだ？」

「別に。特に何も。」

「ふーん。あつ！俺のさあ、ブタの貯金箱あるじゃん。どうかで見かけなかつた？」

「そういうえば、窓の端っこにあつた気がする。」「

はああ！よかつたあ！！無くしたかと思つたー！
あれ。すごく大事なものなんだよね。

「あれ？次の授業なんだつけ？」

「科学だよ。たしか塩酸のことについてだつたと思つたけど……。
・はつ！…

「どうしたの？」

「蓮、蓮！俺、ちゃんと予習したつけ？」

「お前なあ。俺がつきつきりで教えただらうがー！…
「そつだつけ？」

あ、そういういえばやつた氣がする。

蓮がすゞぐ頑張ってくれたような…………。
ま、半分くらいしか覚えてないけどなつー…。

先生が入ってきて、チャイムと同時に挨拶をした。

「えー。予習はみんなしてこると思つから、どんどん進むや。教科書の1-4ページとノートを開け。」

いつもの作業なので、ほとんどの人は言われる前に開いていた。
どくろは、手が力サカサして14ページをまだ開けずにいた。
苦戦しながらも、なんとか教科書とノートを開いた時には、黒板になにやらたくさん文字が書いていて、わからなくなっていた。

全つ然わかんねえ。

「蓮、今どこやつてんの？」

「塩酸の危険性。」

うん。わかんない。

わからないままで授業はどんどん進んでいた。
いつもどおり、チャイムとともに挨拶をして、授業は終わった。

「今日ひてた、午前で終わりだよな。確か。」「

「え？ そつなの？」

「今日は午前学習だ。午後からは特に何もない。」「

「やつたあ！」

「よし。寝よう。あ、一緒に飯、食おうぜ。」

確か、今日の昼飯は焼肉定食だったはず！！

「今思つたんだけどさ、焼肉定食つて四字熟語？」

「多分四字熟語だよつ。」

咲楽ちゃんが言つてだつたら四字熟語だよ。

「今日、俺、用事あるから5分で飯食い終わるからな。」

「早くね？つてこいつが用事つて何？」

「いろいろ。」

いろいろって……。曖昧だな。

ゆっくり飯食わないとのどに詰まるから氣をつけよう。口に出して言わないけどなー。

なんか最近、蓮のノリが悪いんだよな。すぐにビックに行くし。・・・・・ついて行つてみようかな。いや、待て待て待て。もしバレたら蓮、確実にキレるよな。蓮がキレたら何するかわかったもんじゃねーし。

「そういえばさあ、巻君つてあんましどくひ君のことを名前で呼ばないよね。いつもお前つて呼んでるよ。」

「じゃあ今度から名前で呼ぶか？」

「俺、どうちでもいいぜ。」

「じゃあ名前で呼んでねつー。」

「・・・・・マジか？」

「嫌なのかー？俺の名前を呼ぶのが嫌なのかなー？」

「ちょ、そんな顔すんなってー！マジで傷つくからー！俺のガラスのハートがー！」

「今度から名前で呼ぶように心がける。」

「嫌そうな顔で言つなあああああああーーー！マジでズキッて来たからー！ちよつとへこんだからーーー！」

「早く食べよ。ついでるんだ。」

「用事だつて？大変だねえ。」

「別に大変じゃないが、自分自身のためにやつてゐつて感じだ。」

「へえー。偉いな。意外と。」

「意外とつて何だよ。意外とつて。」

焼肉定食をもつて、適當な場所に座つた。
蓮は高速で食べて、5分で食べ終わつた。
足早に食堂から出で、どこかに行つてしまつた。

「どこに行つてるんだろうな。蓮の奴。」

「行つてみたら？」

「バレたら確実に殺されるつて……！」

うん。間違つても行くもんか。

俺は危ない橋を渡らない主義なんだ。

・・・・・何言つてやがる自分。

「午後から何しようかな。」

やつぱり寝るしかないつしょ！

よし。課題を早く終わらせて寝るぞ……！

その後ビバは、宿題に苦戦して、やつぱり寝る時間は同じだった。

授業と蓮の行動2（後書き）

蓮サイドで書いてみたいなあ・・・・・。
よし。書こう！ いつか。
読んで下さりありがとうございました。

真と樂しい授業（前書き）

21話題です。
よいじくの願いです。

夏と楽しい授業

「あつつか…………。」

暑すぎで起きる気がしない夏の朝。

蓮の寝起きの悪さも一段と増していく。

「まひ、起きろ。」

「うう…………無理。」

何度も寝返りをしたせいか、蓮のセミロングの髪に寝癖がついている。

「どうも、保冷剤くれ。」

「あいよ。」

どうもは冷蔵庫から保冷剤を取り出して、蓮に向けて投げた。
首のところに直撃して、わずかに蓮が声を出した。
しばらくしてやっと蓮が起きた。

顔には疲れの色が見える。

「ダメだ。頭がボーッとする。」

「水を飲め、水を。」

水の入ったペットボトルを蓮に渡す。

「あつい…………死ぬ…………。」

ヤバイ。蓮の機嫌が最悪だ。

窓を開けて寝なかつたから部屋の中はサウナ状態だし・・・・・。

「今日、何曜日だ？」

「土曜日。明日休みかあ。」

シーツは汗でビシャビシャだし、汗が止まんねえ。
ヤバイよこの暑さ。エアコンないからな。この部屋。

「あ、急がないと。時間がヤバイ。」

蓮やベエ！汗かいてねえし！…すげえ！…この暑さで汗かかない
とか！

いいなあ汗をかかない人って。そういう体質なんだろうな。

どくろ達は朝の訓練にギリギリ間に合わせて、クソ暑い中ランニングをした。

「やつと終わつたあああああ！…きつかった！…」

「シャワー浴びたいね。」

蓮以外、汗だくだ。

「どくろ君、タオル使う？..」

咲楽はタオルを余分に持ってきていた。

「使う使う。サンキュー。」

「巻君はいいなあ。汗かかなくて。」

「汗臭くないなんて、男じやないぜ！…」

「うざい。」ういう体質なんだよ。俺は。

「次の時間体育だよつ！…プールつ！…」

「おおつ！…マジでか！…ラッキーフ…！」

やつた！…プールだ！…思いつきり泳ぎたいぜ…！…

アカデミーに通つてたからな！…泳ぎだけは自信あるぜ…！…

それと、咲楽ちゃんの水着が見れる…！…

「う、嘘だろ？」

いやつほおおおおおおおい！…！…！…！…

体育の先生が熱中症で倒れて、代わりに遥先生が教えてくれるって
よ！…！…！…

なんてパラダイス！…！

どくろはウキウキ気分で着替えた。

どくろは、着替えている蓮の方を、チラツと見た。

うおー！…何だあの筋肉！…！

やばつ！…かつけー！…髪の毛を結んでるし！…

服着てたら、ただのヒョロ男のくせに、脱いだり細マッヂチョかよ！…
すげーな。

どくろはあわてながらも着替えた。

後ろから、蓮が話かけた。

「着替え終わつたか?」

「おう。見てのとおり、着替え終わつたぜー。」ゴーグルもちゃんと持つたしー。」

更衣室を出て、先生のいる方へ行つた。

כְּרָבָבָה

遥先生！！なんて欲張りボディー！！
ボンツキユツボンじゃないですか！！

ヤベエ。興奮してました!!!!!!

うかな？」
一巻君、どうろ君。スクール水着なんて、初めて着たんだけど、ど

「巻君、また筋肉付いたねえ。かつこいい！」

俺も咲楽ちゃんにかつこいいつて言われたい！ああもう！－ズルいぞ！

「蓮。日影行ひへ。」
暑すぎ。・・・・・はあ。」

蓮の方を向くとキャーキャー言われながら女子に囲まれていて。

「蓮君つ。腹筋触らせてよお。」「ちょっと触りせてえ。」「減る

もんじやないしいいじゃんっ！」

すごいな。イケメンと呼ばれる人間は。
少し腹筋がわれてるくらいでキャーキャー言われてさ。
まあ、蓮はクラスの中でもモテてるけどさ。
ほかのクラスの人たちも見に来たりしてるけどさ。
べつ別に羨ましい訳じゃないんだからなっ！
・・・・・すみません。素直に羨ましいです。俺も黄色い声を浴
びたいです。

「おい。お前らさつさと並べ。準備運動するぞ。」

先生の声で、全員並び、準備運動をした。
一人ずつプールに入り、背の順に並んだ。

「うひょー。冷てー。」

ひんやりとしたプールの水が体を冷やす。
外にプールがあるからか、わずかに葉が浮かんでいる。

「えー。いきなりだが、このボールをみんなで5分の間、取り合つ
てもらひ。最後に持っていた奴には・・・・・うーん。どうしよ
うか。」

みんながそれぞれ提案を出し合つ。
その中から、先生が適当に決める。

「じゃあ。巻蓮の体のいろんなところを触つていい権利と、私の体
のいろいろなところを触つていい権利を10秒だけあげよ。」

女子はキヤーと喜び、男子は蓮以外、うおおおお……と雄叫び（？）をあげた。

よっしゃああ……張り切るぜ……

「では今から5分間……いくぞ……」

ボールをプールに放り投げた。

ちょうどよく、咲楽のところにボールが行き、反射的にボールを掴んだ。

ボールのところに人が雪崩のよつに集まつた。

「咲楽ちゃん！危ない！」

咲楽はプールから飛び出して、上から降つてくる人達を竜巻旋風拳（笑）で蹴り飛ばした。

「ふぐうつ……」

どくろは飛んできた人にぶつかつた。

「あ。足がすべっちゃつた。ごめんね？」

いや、これ、足がすべつたの問題じゃないでしょお……

攻撃してるとね!? 攻撃してるとねえ!?

咲楽の手からボールが滑り落ち、水の上にプカプカと浮かんだ。咲楽の竜巻旋風拳から逃れた人達が一気にボールに集まつた。

くつそ。水中だから動きにくい……

どくろは泳いでいいのに、わざわざ歩いて移動していた。
どくろの田の前で、ボールの奪い合いが繰り広げられている。

「ん？あれ？なんか人が沈んで……？」

ボールを奪い合っている人達がどんどんプールの中にもぐっている。
いや、沈んでいるといつた方が正しいかもしない。
どくろがプールの中をのぞくと、異様な光景を田の間たりにした。

ええ――。何やつてくれちゃつてるんですか。蓮は。
水の中で思いつくそ殴つたり蹴つたりしてんじやん。

やがて人がボールの周りからいなくなっていた。

ボールの近くで蓮がプールから顔を出した。
息が切れていた。よっぽど息を止めていたのだろう。

「終了。ボールを持つていたのは……蓮か。予想どうりだ
な。」

「ふー。私、頑張ったのになあ。」

蓮が権利を使わなかつたのは言つまでもない。

続く

夏と楽しい授業（後書き）

クソ寒い中、夏の話を書くのはなんだか複雑です。
読んで下さりありがとうございました。

初仕事と人形（前書き）

22話目です。
よろしくお願いします。

初仕事と人形

「昨日は楽しかったあー。」

「咲楽けやさ、ほしゃざわさだつたしー。」

今日は昨日のプールの後の日曜日だ。

若干筋肉痛・・・・・つてこいつが全然泳げてなかつたしーー！

「つていうか蓮はや、何で昨日張り切つてたんだ？」

「俺の体を触らせたくなかつたからだ。思い出しただけで鳥肌が立つ。」

そういうことか。

ま、もし俺が権利を得たら・・・・・・

「どうしたの？どうる君。鼻血出てるよ？」

「いやらしいことでも考えてんだる。」

「いやだあ。どうる君、変態！」

「いや、違つてーー別にいやらしいことなんか「考えてたんだろ。」

「

157

正直に言つます。考えてました。

だつて、あのいやらしい体の遙先生だぜ！？
男なら一度でも考えたことあるでしょーー！

「そろそろ仕事しないか？」

「何だよ。いきなり。」

俺が秘する妄想をしてくる時にいきなり・・・・・つてこいつが思

いつせり話の腰折りやがったな。

「もうだね。そろそろ仕事したいなあって思つてたんだよね。」

「えー？あ、お、俺もちょっと思つてたんだよなあ……」

嘘ですけど。

「じゃ、受付のどこへ行へか。」

受付は職員室の近くにあり、受付嬢がにこやかに待ち受けている。日曜日なので、仕事をする人がやけに多い。どくろ達は列に並んだ。その中には、ハク達の姿もあった。
どくろは、ヒソヒソと蓮に耳打ちした。

「ハク達、あそこへいる。」

「知つてる。何だか久しぶりだな。」

あの出来事以来、ハク達を食堂や部屋、廊下などで一切見かけていない。

どくろは寝泊りしているかはどくろは知つているが、蓮は知らない。

「どくろ。いつに来るよ。」

ヤバイヤバイ。鉢合わせになつて氣まずい感じになつたら、もう俺、無理だから。倒れるから。

「あーライトイリーラーん！」

おー——————！

なんて」としてるんだ！咲楽ちゃん！！

ほら、こっち睨みつけるよライトっていう人が！！
気づいてハクと渚もこっち見てるし！！

「久しぶりだねえ。ずっと部屋に来ないから心配してたんだよ？」
「…………別に、あんたに心配してもらひ筋合いなんてないわ。」

「

相変わらず態度悪いなあ。こいつ。

「ライト。行きましょう。仕事がありますから。」

「すみません。ハクさん。」

そう言って、職員室の方に、外出届を出しに行つた。

「久しぶりに声を聞いたな。なんか他人みたいだ。」

「俺達だって赤の他人だろ。」

「そりだけどさ。なんか、こう、関わりがないっていうか、なんと

いうか・・・・・・」

「どうろ君の言いたいこと、分かる気がする。なんか冷たいよね。
ライトちゃん達。」

そう言つている間に、前の人受付から去つていった。

「お、俺達の番だぞ。ボーツすんな。ビくん。」

「えつ！？ああ、そうだな。」

忘れてたぜ。俺達は並んでたんだつた。
おつ！綺麗なお姉さん！受付嬢か。

「お仕事ですか？」

「あ、はい。」

びっくりしたー。

勢いで返事しちゃったよ。

「ランクは何ですか?」

「何にする?」「Dで。」「Dだよね。」

「じゃ、Dで。」

やっぱロランクだよな。初心者ですから。

「ロランクのお仕事は、1つしか残っていないのですが・・・。

「んーと?お人形を捜してください?」

「これで良いんじゃないかな?樂だし。」

「じゃ、これで決定で!-!」

「かしこまりました。」

受付嬢がなにやら紙に書いて、どくろに渡した。

「この紙を担任の人に渡し、外出届を出してください。依頼者は10代の少女で、学校の近くの公園で待っているそうです。説明を聞いてください。」

「は、はあ。」

一気に説明されたんで、ちょっとわかんないけど、とりあえず公園行つたらいいんだよな。

職員室に行き、遙先生に外出届を出した。
なんだかめんどくせそう、元気

「ああ。わかつた。」

と、事情を言う前に言われたので、どうも少しうつむいたえながらも、外出履歴をGETした。

「あれ、どうして？」

張り切ってるね!! とぐる君

一組は行動してると云ふに取らかしい

「一〇四號」

マジか。なんかごめんな。蓮。

「じゃ、行くぞ。咲楽、どう。」

卷之三

四

昼前、勢いよく玄関から足を踏み出した。

続
<

初仕事と人形（後書き）

やつと仕事までいきました。
読んで下さりありがとうございました。

初仕事と人形2（前書き）

23話目です。
よろしくお願いします。

初仕事と人形2

「今日はよく晴れてるなあ。」

雲一つない快晴！！

あ、大きい雲があった。

「大きい入道雲だねつ。」

夏ならではの入道雲が空に浮かんでいる。

風も涼しく、昨日よりは暑くない。

でも、ギラギラと照りつける真夏の太陽がどくろ達を襲う。

「今日も暑いな。」

「アイス食いてえ。」

俺の家の近くに今では珍しい駄菓子屋があるんだけどなあ。
おっちゃん、今、何してるかな。

きっとエロ本でも読み漁つてるだろうな。

寄がいても読んでるからなあ。おっちゃんは。

「やつと公園についた！日影！…日影行こうぜ！…」

「待てよ。まずは依頼主を捜さなきゃいけねえだろ。」

「あつ。忘れてた。」

「忘れちゃダメでしょ？」

確かに10代の女の子だけ？
っていうかさ、人少くない？

「ねえねえ、あの子じゃない？女の子って。」

咲楽が指をさしたのが、背の小さい、いかにも小学一年生みたいな女の子だった。

「いや。あれは違うんじゃない？」

「小さすぎるだろ。10代に見えねえよ。」

「人は見かけによらないの！巻君つ！」

咲楽はそう言って、あの女の子に駆け寄つて行つた。

「私達に探し物をしてほしつて頼んだのは君かな？」

「ただけど。」

「うわっ無愛想な奴！！

つていうかこいつが10代の女の子…？小さすぎるだり…。

「人形を捜してほしいんだっけ？」

「ただけど。」

「最後にあつたのはどこかな？」

「いつも抱っこしていたんだけど、学校には持つていけないから、部屋に置いといて、帰つてきたらなくなつてた。」

「ここの咲楽ちゃんに任せよう。」

「俺は苦手なんだ。無愛想な奴が。だつてや、話続かないじやん…！しらけんじやん…！」

「何年生なの？」

「答える必要はないと思つけど。」

「4年生？」

「違ひじ。」

え！？

じゃあ小5か小6！？
マジでか。ちつちやすぎだな。

「人形はどんな形？」

「ウサギで、背中に数字を入れたらロックを解除できるやつがつい
てて、全体的に白色。誕生日にお母さんが買っててくれたの。で
もロックを解除できる数字は絶対に教えてくれなかつたの。」

こいつ、人形のことになるとよくしゃべるなあ。

それだけ大事つて事か。
名前、まだ知らないんですけど。
よし。聞いてみるか。

「君た、なんて名前？」

「藤村 鳴海くフジムラ ナルミ」だけど。」

「へ、へえ～。いい名前だねつ。」

やつぱり態度悪っ！！
絡みにくい！！

「全然いい名前じやない。離婚したお父さんがつけた名前だから。」

結構複雑な家庭の事情キタ━━━
超絡みにくいから！！！

なんかごめんね？いい名前とか言つちやつて。

「とにかく捗そうぜ。その人形つてやつ。」

「そうだね。」

「家の周りから捜してみるか。家、どこのにある？」

「「！」から右に曲がったところの商店街の手前。」

さつやくどくろ達は鳴海の家に行つた。

「…………広っ…………！」

何だこの家……もはや城じゃん……城……

「家中は家政婦に全部捜させた。けど見つからなかつた。」

「じゃ、俺どくろは商店街を調べるから、咲楽と鳴海は家の周りを調べてくれ。何かあつたら絶対にケータイで連絡しろよ。今は11・30だから、12:00までに鳴海の家に集合。」

「うん。わかつた！頑張ろうね！鳴海ちゃん！」

「本気で捜してよね。」

どくろと蓮は、商店街の方へ行き、担当を決めた。

「どくろは商店街全体を捜してくれ。俺は聞き込みをする。何かあつたらケータイで連絡しろ。」

「おつづけ！わかつたぜ……！」

分かれて行動するのは正直心細いけど、一肌脱いでいつしょ頑張るか！！

どくろは、急いで捜したが、今は毎時、人ごみの中では走りたくても走れない。

それに、まず動けない。

どくろは一日路地裏に行つた。人通りがない。

「ここ」で捜すか。」

人ごみの中で捜しても見つかる気がしねえし、ただ疲れるだけじゃん。

ドンッ

誰かがどくろの肩にぶつかつた。

「つと、すみません。」「チツ。」

・・・・・なんなんだ人にぶつかつといてよお。
でも黒いスーツ着てたし、黒人だし、白いウサギの人形持つてたし、
体格もよかつたから、頭の良い俺は喧嘩を売らなかつたぜ。
ただヘタレなだけです。調子こいてすみませんでした。
・・・・・え？

「白いウサギの人形あ！？」

さつきの黒いスーツの黒人は、右の角を曲がつていった。
どくろは黒いスーツの黒人を追いかけた。
黒いスーツの黒人は、白いアパートの階段を上つていった。
どくろはケータイを開いて、蓮に連絡しようとしたが、時刻は11：
57。商店街を急いで抜けないと間に合わない。
急いで鳴海の家に戻つた。

「やつときたか。2分の遅刻だ。」「いいじゃん。2分くらい。」

「咲楽たちは人形、見つかったか？」

「全然。聞き込みとかしたけど、なんにもわからなかつた。」

「そうか。どくろは？」

「黒いスーツを着た、黒人の男が、白いウサギを持つてたのを見たぜ。」

そういう瞬間、全員が驚きの表情を浮かべた。

「奇遇だな。聞き込みをしたところ、黒いスーツを着た、黒人の男が白いウサギを持っていたといつ証言があつたんだ。」

・・・・・あやしい。

完璧あやしい。

「鳴海、家政婦とやらに家に盗聴器と盗撮カメラが仕掛けられてないか確認させてくれ。」

「わかった。」

鳴海はケータイを取り出して、家政婦に盗聴器と盗撮カメラがないか調べさせた。

「これはただの探し物じゃねえな。」

「そうだねえ。大変なことになつたね。」

「なんでそんなに落ち着いてられんだよ！…事件のフラグが立ちまくりじやねえかよ！…」

「これがロランクの仕事か！？危険すぎるだろ！…」

続く

初仕事と人形2（後書き）

鳴海ちゃん、ツンテレの「テレがないですね。
私が思うに、鳴海ちゃんはツインテールです。
読んでくださいありがとうございました。

初仕事と人形3（前書き）

24話目です。
よろしくお願いします。

初仕事と人形3

今、俺は、黒いスーツを着た黒人が入つていった白いアパートの前に来ている。

え？なぜかつて？俺の方が聞きたいぜ。

そういう流れだつたんだよ。

あれは近くのファミレスで昼飯を食つていたときのことだった・・・

「人形を取り返すにはお前が見た、白いアパートに潜入しなきゃいけないな。」

「そうだな。どうやつて潜入するんだ？」

「もちろんんじくろが。」

「え？」

「すゞーい！じくろ君！！大役だねっ！」

「え？待つて？」

「頼んだから。絶対人形を取り返してよ。」

これつて俺が潜入する系！？

嘘！？マジで！？

「俺が予想するに、あの人形の中に入つている何かをあの黒いスースを着た黒人が狙つてゐるわけだ。まあ、単体ではないだろう。大きな組織だ。んで、今は暗証番号が分からずジタバタしているわけだ。このままだと鳴海が危ない。」

「そんで、俺に行けっていうことか？」

「そういうことだ。俺は外で見張つているからじくろは正面から行け。」

「ちょっと待つて。死ぬじやん。俺、確實に死ぬじやん。」

どくろは身振り手振りで危険ということをアピールした。

どうしても一人で行きたくないのだろう。

「大丈夫だ。黒いスーツを着た黒人がどくろに気を取られている間、
咲楽が人形を取り返す。」

「What!? 僕は囮か!?!?」

「そういうことだ。」

あれ? ちょっと待て。

何で黒いスーツを着た黒人達は人形を引き千切つて中身を取り出さ
ないんだ?

「なあ。なんでロックをわざわざ解除しようとしてるんだ? あいつ
らは。人形を引き千切つちゃえればいいのによ。」

「その人形は何で引っ張ろうと何できりうと絶対に破れない纖維で
できているから。無理。」

ああ。なるほどね。

「じゃ、ここに無線機があるから何かあつたら知らせてくれ。」

そう言つて蓮は、それに無線機を渡した。

・ ・ ・ ・ ・ 囮は俺で決定したのか!? 僕が死んでもいいのか!?

「じゃ。移動するぞー。鳴海は危ないから、家にでも隠れてる。」
「うん。わかった。」

・

· · ·
とこり」とで、俺が今ここにいますとさ。
どうする。どうする俺！－－－－！
行くしかないんだけどさ。

どくろは震える手でインター ホンを押した。

ピーンポーン

その音が、大変なことになつた。

黒いスースを着た黒人の男がドアを開けた。

「あ、あのー。白い、後ろに鍵がついた、ウサギの人形を持ってますよね？返していただけませんか？」

「才前、誰ダヨ。」

そんなこと別に聞かなくていいだろおおおお！？

早く人形持つてこいやああああああああああ－－－！

早く帰りたい。早く帰りたい。早く帰りたい。早く帰りたい。

「俺つか？」

「イヤ、チゲーヨ。」

え？じゃあ誰だよ。

つていうか態度悪いなこの黒人。

外国の奴つてこんなんだつたつけ？

「才前の後ろつ！グフウツー！」

何が起こった？

「！？」

どくろが後ろに引っ張られた。
どくろがその姿を確認すると、赤いマフラーが見えた。
そう。黒斬ハクだ。

「ハク！？どうじて元へ！？」
「…………」

シカトですか。

つていうか何でここにハクがいるんだよ！？意味わからんねえ！？

どくろは無線機を取り出して、蓮に報告した。

「蓮！ハクがこっちに来たんだけど……」

「ああ。こっちも渚が来たぞ。」

「ハク、思いつきり突入していつたぞ！？」

「多分あいつらも、人形の中身を狙ってるんだな。」

「咲楽ちゃんは無事か！？」

「知らないが、咲楽の方もライトが行ってるだろうな。」

「どうしよう。俺。困ったわあー。助かっただけさ。」

「どさくさにまぎれて人形取つて來い。」

「え！？正氣！？」

「正氣だ。さつさと取つて來い。3秒以内に。」

「え！？ちょっと待て！！」

蓮からの返事は来なくなつた。

「くつそ。何なんだよあいつ！人事だと思いやがつてよ。」

でも、なんだろうな。このワクワクした気持ちは。
なんか胸からゾクゾクツツする感じ。

「よつし。いつちょ頑張ろうかなつ！…」

どくろは入り口を覗くと、ハクとライトが中にある、外国人たちと戦つていた。

壁をなぞるようにして、どくろは人形があると思われるリビングに向かつた。

廊下では、ハクが自分よりも大きいラフな格好をした黒人と戦つている。黒いスースを着た黒人は氣絶していた。

どくろはサササッと廊下をぬけると、リビングにたどり着いた。リビングではライトが軽々と家具を持ち上げて、黒人達に投げつけていた。

「あたしい、意外と力持ちなんですわよつ！」

手当たり次第、何でも投げつけていた。タンスやイス、テーブルまでも。

・・・・・力持ち過ぎるだろ。俺は夢でも見てんのか？あんなの、アニメでしか見ええよ。
人形はどこだ・・・・・?

どくろはきょろきょろと捜していたら、大きい人影が目の前にあつ

た。

「「つおーーー」

反射的に横に避けたら、どくろの後ろにいた人と激突していた。

「あはは。俺も結構やるじやん。あ。人形だ。」

ライトが投げつけたテーブルの横に、ウサギの人形があつた。
どくろはそれを拾うと、一目散に咲楽の方へ逃げるようにして行つた。

「取つた取つた取つた取つた！！！！！人形！！！」

「わああー！やつたね！どくろ君ーーーおめでとうーーー！」

どくろと咲楽は裏口から出て行き、蓮の方へ走つていった。

「蓮つーー！やつたぜーー！人形GETしたーー！」

「おお。やつたな。」

予想外の流れだつたけど、なんとか人形を搜し出したぜーー！よく頑張つたぞ俺！！

ハク達がいなかつたらどうなることかと思つたぜ。ナイスタイミング。

どくろ達は、人形を渡しに行つた。

鳴海は家の前で出迎えてくれていた。

「あつーーー」

ゞぐるの手の中にある、ウサギの人形に気づいて、とてもうれしそうな顔で駆け寄ってきた。

「ありがとう……見つけてくれたんだ！！」

「おうよ。俺が一生懸命、頑張ったんだぜ。」

「ふーん。」

やつぱそつけねえな。このガキ。せつかく人が頑張って捜してやつたのによ。

ま、ありがとうって言われたから、正直嬉しかつたけど。

「どう、このロックを解除できる? できたら解除してほしいんだけど…。」

「多分や、お前の誕生日だと思うわ。」

「おう。さすがだな。蓮。なんかありきたりだけどさ。」

鳴海は自分の誕生日を数字に当てはめた。
カチヤツという音がして、見事にロックは開いた。

「中身、何が入ってたの?」

「DVD。」

「見てみようぜ……せつかくだから……」

「別にいいけど。」

続く

初仕事と人形3（後書き）

この話に出てくるウサギの人形ってどれくらいの大きさなんでしょうね。

そこまで設定していなかつたんですけど、DVDが入る大きさって
そうとうな大きさなんじゃないかと思います。

読んでくださいありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8746z/>

高校生活と探し物

2012年1月10日22時47分発行